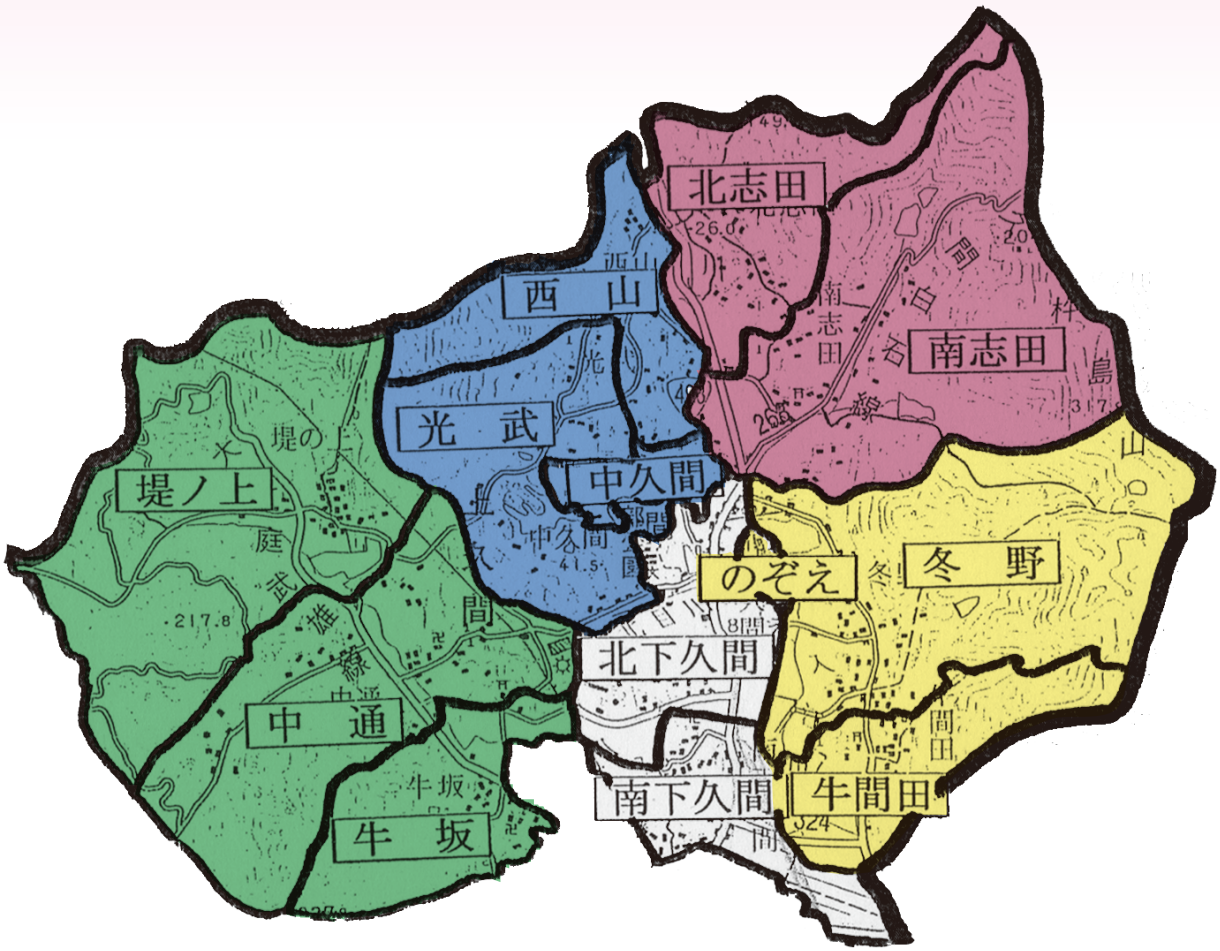
保存版

情報誌 総集編 和みのさと久間



令和元年９月30日

久間地区地域コミュニティ運営協議会

目　次

はじめに

Ⅰ．久間地区の神社
① 八幡宮(八幡神社) …… 1
② 志田神社 …… 3
③ 牛間田天満宮 …… 3

Ⅱ．久間の平家落人伝説等
① 十郎藤 …… 5
② 維盛社 …… 7
③ 虚空蔵山 …… 7

Ⅲ．久間の焼き物
1．志田焼とは …… 9
2．志田西山窯 …… 10
3．志田東山窯 …… 11
4．明治以降の発展 …… 12

Ⅳ．久間の歴史
1．はじめに …… 13
2．古代の久間 …… 13
3．歴史書に現れる久間 …… 14
4．中世の久間 …… 15
5．幕藩体制下の久間 …… 16
6．村の統廃合を経て町村制へ …… 17

Ⅴ．久間地区の今昔
1．冬野区 …… 18
2．南志田区 …… 24
3．北志田区 …… 30
4．西山区 …… 36
5．光武区 …… 42
6．堤ノ上区 …… 48
7．中通区 …… 54
8．牛坂区 …… 60
9．南下久間区 …… 66
10．北下久間区 …… 72
11．牛間田区 …… 78
12．中久間区 …… 84
13．のぞえ区 …… 90

Ⅵ．消防団のはたらき …… 96

おわりに …… 97

はじめに

久間地区地域コミュニティ運営協議会は、設立以来10年を経過しました。

その間、新しいコミュニティセンターも設立され、地域住民の横のつながりが出来たことで融和と親睦が図られ、一体感を強く感じるようになりました。

平成22年10月１日情報誌「和みのさと久間」の創刊号を発行し、今日まで17号を提供してきました。

当初は久間地区の史実に基づく、神社、平家落人、焼き物について編集し、以来13行政区に係る地域の歴史や実情等について地区内の長老有志の方々のご協力により作成してきました。

今回、さが未来アシスト事業費助成により全17冊を再編集し、一冊にまとめた「和みのさと久間」総集編が完成しました。

この事業は一冊にまとめるだけが目的ではなく、この総集編を使って各地区の住民をはじめ、小中学生を対象にした歴史講座を開催し、地区の歴史や史跡を再認識し、地域を大事にし、住みたい地区にしたいという思いが更に醸成されていくことを目的とするものです。

これを作成するにあたり、久間地区地域コミュニティ総務広報部情報誌担当班の方々をはじめ、各地区役員の方々のご協力のもとに完成できたことに深く感謝申し上げます。

久間地区を知る貴重な資料として活用して頂けることを記念いたします。

令和元年８月31日

久間地区地域コミュニティ運営協議会会長　　光武　一行

久間地区の皆さんへ

地域コミュニティでは、地域づくりの一環として久間地区をよりよく知って頂くために情報誌を発行することになりました。

はじめに３ヶ所の神社でのお祭り等を特集いたしました。

Ⅰ. 久間地区の神社

① 八幡宮（八幡神社）

『八幡神社由緒』によれば、「祭神　応神天皇、建久元年（1190）旧八月十五日の創建にて里民の尊崇篤く旧藩主の尊崇又厚く鍋島直澄公奉献の鷹の絵並八幡愚童記今に存ず。当宮は城山の鬼門（うしとら・東北のすみ）に鎮座し給うものにして当地の鎮護の神なり、明治六年村社に列せらる」とあります。建久元年と言えば今を去る820年の昔創建された社です。

森　敏治　著「塩田昔話」より

旧社殿（前塩田工業高美術教諭　大久保孝雄氏画）

現在の社殿（平成元年９月15日竣工）

●蓮池藩「請役所日記」より

元文三年九月十五日（1738年）

一、上久間村百姓共ヨリ、風虫除キトシテ、同所八幡宮へ浮立ノ願イ相懸ケ置キ候。右ノ願イ成就、来ル十九日仕度キ旨、願イ候ニ付、願イノ通リ差シ許シ候也。

※当時は浮立の奉納は許可が必要だったようであります。

●八幡宮のお祭りのこと

八幡宮（通称　八幡さん）は鎌倉時代に、鶴岡八幡宮（鎌倉）の分霊をお迎えして祭ってあり、応神天皇と平維盛を合祀してあるといわれ、とても位の高いお宮だということです。かつて、久間村だったころは、村全体の鎮守のお宮でしたので、お祭りは大変にぎわっていました。夏祭りや秋の大祭（お供日）には、境内に店が並んで子供たちが大勢遊びまわり、舞台では村人たちの唄や踊りやお芝居が、笑いとため息と涙を集めていました。

今日、八幡宮の氏子は、南下久間・北下久間・光武・堤ノ上・中通り・牛坂の６部落です。祭事は年に10回、次のように行われています。

１月１日	歳旦祭	９月15日	夏祭り
２月11日	建国祭	11月３日	秋まつり(供日)
３月27日	祈年祭	11月30日	神待祭
７月５日	千巻祭	12月15日	新嘗祭
８月31日	風神祭	12月31日	お火焚祭

９月の夏祭りと11月の秋祭り（お供日）と12月お火焚祭は上記６部落の持ちまわり当番で、昔日のにぎわいこそありませんが、しっかりと継承されています。中でも、秋の大祭では、獅子舞や古式ゆかしい御神幸行列が下の宮に下り、舞と浮立を奉納します。８月31日の風神祭（風日）には、夕方、６部落がそれぞれの浮立を奉納します。同じような浮立でも少しずつ違ったパフォーマンスを拝殿前で奉納し往時を偲ばせます。また、６部落年２回ずつの月当番で清掃をして、境内をクリーンに保っています。これから、八幡宮のお祭りが、地域コミュニティの核の一つとなって、新しい姿のにぎわいがうまれることを願っています。

北下久間区　林　良二　著

② 志田神社

志田神社は、権現さんと称し南志田にある神社です。境内には樹齢幾百年をへた大きな樅（もみ）の木があり、神域のおごそかさと相まっています。『久間郷土誌』によれば伊万里山代の青幡神社の分霊をおまつりしたと伝えられています。志田村は、鍋島千之丞の知行地百二十石であったと伝えられ鍋島千之丞がおまつりされたのでしょう。祭神は武甕槌命・經津主命・比売大神・天津児屋根命と伝えられています。志田の方々が昔から尊崇あつい神社でした。拝殿は、大正４年11月御大典記念として再建されたものです。

森　敏治　著「塩田昔話」より

●むかしの行事

伊万里山代の青幡神社（親）より北方の吉富神社（子）から志田神社(孫)として永年まつられました。1705年頃より始まったと考えられ、秋祭りは約50年前までは八幡神社の下宮であり獅子舞のおくだりがあり、子供相撲・活動写真・にわか・狂言等の他に出店がありました。銀杏の木ライトアップ以外は変わりはないと思われます。

●いまの行事

６月末日頃	田祈祷　豊作であるように
７月14日	夏祭り（祇園）鐘浮立　豊作であるように
８月31日	風日（祇園）鐘浮立　豊作祈願台風除け
９月23日頃	彼岸篭り　稲が良く育ちました
11月３日	秋祭り（前に飾り付け準備）稲が良く取れました
	餅配布　全区民の懇親会　カラオケ　ゲーム等
11月30日	お火焚き　前後銀杏の木ライトアップ
12月20日頃	正月飾り
12月25日	大祭り(志田神社境内の神々・溜池の水神様祭り)
	稲作への溜池に感謝

南志田区　小林　亨　著

③ 牛間田天満宮

牛間田天満宮の社伝によれば正暦年間（990－995）牛間田天満宮が創建されたという牛間田、冬野の方々はもとより久間塩田の方々の尊崇あつい天満宮でした。

天満宮・天神社は菅原道真公をおまつりする神社であります。牛間田天満宮境内には安政七年西冬野村若者寄進の燈籠、文久元年西冬野村氏子中寄進のこま犬、嘉永６年、牛間田村・西冬野村寄進の絵馬、本殿後方には塩田石工筒井幸右エ門がきざんだ見事な石の祠もあり庄屋村役の名が刻されています。

森　敏治　著「塩田昔話」より

天満宮神社の思い出

天満宮夏祭りの古き良き時代の記念写真をコミュニティによせられましたので掲載致します。昭和35年が最後のお祭りでその時の記念写真です。一番前列の女性陣が平成２年に一回かぎりの復活夏祭りをもよおされ、その時の写真だそうです。

子供の頃から天神さんと呼んでいました。その天神さんでは３部落で冬野・上牛間田・下牛間田の順で夏祭りが行われていました。毎年８月25日が夏祭りで田植えが済んだ後夏祭りに向けて公民館に寄って部落の青年団員の方々が、にわかや踊りの練習を本番に向けて頑張っておられたのを思い出します。昭和30年代は公民館に寝泊りをして練習をしておられたと思う。８月25日夏祭り当日は我々子供達は朝早くから観覧場所取りで確保するとムシロを敷き、とられないように一日中番守したものでした。夜６時から始まり夜遅くまで楽しい時を過ごした、又夜店も出ており、10円玉をにぎりしめ買ったものはお菓子だったと思う。

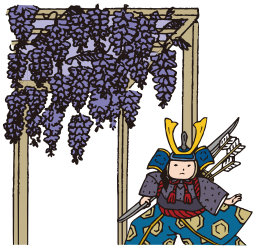
８月31日夏休み最後の日、部落では風日（かざび）と言う行事があり、豊作を願って手を合せて拝んでいました。青年団の方達が笛や太鼓浮立の鐘を打ちながら子供達は、提灯を手に天神さんまで行列を組んで道浮立を冬野平野に浮立の音がこころよく響いていました。冬野部落には素晴しい鐘がありながら今では出番がない宝の持ちぐされのようだ。その理由の一つには笛を吹く人がいないのと、若者の減少が原因のようです。

高度成長に伴い昭和39年東京オリンピックを境にテレビ、娯楽施設が普及し、若者達も都会へと出てゆきました。我が村でも例外ではなかったのです。郷土芸能の復活を願う一人ですが昭和30年代の夏祭りは、今はなくなりさみしい今日今頃です。

冬野区　山口　修　著

II. 久間の平家落人伝説等

久間地区には、平維盛にまつわる平家の落人伝説や史跡がたくさんあります。虚空蔵山のふもと光武の里山の地に、牛車に乗って落ち延びて来ました。今回は、その中で「光武区の十郎藤」と「南下久間区の維盛社」、及び久間一番の山「堤ノ上区の虚空蔵山」を紹介します。



往年は県下に類をみない山藤の巨木

（昭和30年県の天然記念物に指定、37年取消）

① 十郎藤

夜には満天の星を、昼には、はらはらとこぼれるほどに咲き誇る藤の大木を仰ぐ。人々の記憶に残る光武の郷はにぎやかでした。昭和30年代まで「十郎藤」には小学校の子供たちが遠足に来ていました。また８月30日の風日には、大人たちが地区をあげて踊りや浮立を奉納していました。人々の声が絶えず十郎藤の周りにあり、豊かな里山の風景がありました。

各地に落人伝説を残す「維盛さん」は、平家の頭領「平清盛」の嫡孫です。1185年の源平の最終合戦である壇ノ浦（下関市）での海戦を待たずに、源義経と対峙した一の谷（神戸市）の合戦の前後に密かに陣中を抜け出し、妻子を都に残したまま、那智（和歌山県）の沖で入水したという説が有力です。27歳の見目麗しい大将でした。

しかし、これは源頼朝の残党狩りから逃れるための流言で、本当は平家の落人として落ち延びた、という話が日本のあちこちに残っているようです。

そしてここ、久間の光武地区にも足跡があります。

十郎藤根元

十郎藤全景

平家の一族は、肥前一円を清盛から恩賞の地として得ていた関係からでしょうか、壇ノ浦の合戦の後、たくさんの公達が肥前に落ちて来ました。維盛さんも、十郎、五郎のふたり家来を連れ、父重盛の領地である杵島の地をめざしました。しかし安住の地を見つけられず、杵島山を越えてようやく塩田郷まで落ち延びて来たました。

源氏の兵士に追われる厳しい旅の途中、どのあたりでしょうか、平家の公達を哀れんだ村人が牛を一頭差し上げたそうです。その牛に荷物を乗せて光武山のふもとまで来た時、あまりの長旅に疲れたのか、牛がばったりと倒れ死んでしまいました。維盛主従は泣く泣く牛を葬り、そこに石の祠を建てました。それが「牛石大明神」です。

やがて今度は十郎が倒れました。維盛さんの必死の励ましもむなしく、湧き出る泉の水を一口飲んで、がっくりと死に果てました。維盛さんと五郎はまた泣きながら、十郎の遺骸を、杵島山を望む泉のほとりに葬りました。そして一枝の藤を手折って墓前に供えました。藤は、最後まで維盛さんを守ろうとする十郎の霊が移ってか、また、維盛さんの十郎を思う真心に感じてか、根付き大きく栄え、春ごとにみごとな花を咲かせました。

光武地区の人たちはこの藤を「十郎藤」と呼び、その下に「十郎権現」をまつり、春ごとに祭りをして拝んだそうです。今でも、毎年八月の終わりに地区の代表が草刈、清掃をした後、しめなわを飾り、お神酒を上げてお祭りを続けています。

藤の大木として、一時は県の天然記念物の指定を受けるほどでしたが、いつしか樹勢が衰え、指定を取り消されてしまいました。往時の勢いはありませんが、このたび、永きにわたって祭りを続けてきた光武地区民の真心に光が当てられ、平成22年12月16日付けで、あらためて嬉野市の天然記念物に指定されました。

（参考文献）塩田町史下巻・久間村郷土誌他

光武区　坂本紀美子　著

おにくまさんの祠

維盛の隠棲（いんせい）の伝説に由来する

② 維盛社（これもりさん）

苦難の末、この地へ落ち延び、竹藪の中の小庵で世を忍ぶようになりました。ここでは、蛇（ひらくち）退治の話が伝わっています。後年、下久間の領主となった維盛の末裔である辻氏がその始祖を祭ったものです。さらに、文政６年明学坊琳仙が久保宿の若者中を使い建立しました。神霊は八幡宮に祭られています。今日も地元の人たちが祭祀しています。

維盛社は塩田町南下久間の小高い丘陵地にある。昔、三位中将平維盛が落人となり、久間光武の山中で乗ってきた牛が倒れたので、その牛を葬った。これが、牛石神社と呼ばれる。維盛は、竹藪の中の小庵で世を忍んでいたが、付近の人々はその風姿のただならずを、敬い慕い、日々食事を運んだりして世話をしていた。付近は草深く毒蛇が多かったので、村人たちは困っていたが、維盛がこれを退治したので村人はとてもよろこんだ。

この下に御神体が祀られている

今なお、この社の土砂は毒蛇除けとして、持帰る人もある。言い伝えによると、この社の下には古刀一振が納められているとのことである。藩主直興公はこのあたりに砲座を築き、射撃の練習をさせていた。また、この地の周辺に柵をめぐらし、住民の立入を禁止、管理をする人に中将の烏帽子を着せていたとも言われている。

現在、江口家の屋敷を立烏帽子というのは、このことからである。この地は元来古墳で、維盛社は後年下久間の領主だった辻氏（維盛の末裔）が、始祖を祭ったもので、神殿の後ろに当初の身体とも思われる、自然石無刻名の碑がある。現在の社は、文政６年12月吉日　明学坊琳仙が久保宿の有志とともに建立したものである。

（参考：久間郷土誌）

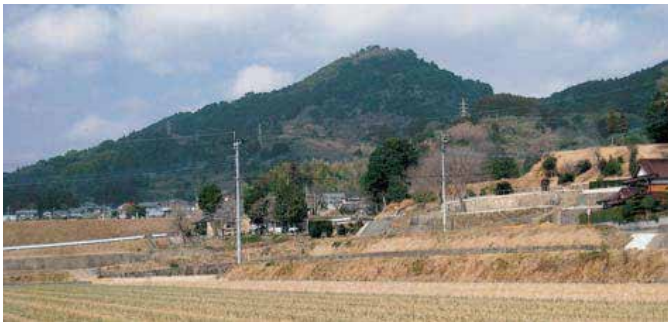
南下久間区　荒木　　司　著

上久間の歌垣の山

虚空蔵山

塩田町と武雄市の境に位置し、山頂には30平米程の社に５体の神仏が合祀されています。秋の彼岸には、豊作を祈願して浮立を打ち叩いて胸突き八丁を登り奉納していました。

山頂からの眺めは四方が開け、絶景のパノラマです。正月元旦に、地元の人達はここに登って新年の素晴らしい「初日の出」を拝み、一年の願い事をしています。



虚空蔵山全景

上久間の人びとの平安と暮らしを支えてきた虚空蔵山は288m!!　頂上からの眺めは視界360度のパノラマであります。北には天山、南は雲仙・多良岳山、西は湯の街嬉野温泉、東はムツゴロウ・海苔で有名な有明海、山頂からの展望は四季折々の風景をたのしませてくれます。

特に有明海に昇る太陽は干潟に金色の光を放ち、言葉で表現することができない大自然のドラマを見ることができ、疲れ果てた私たちに生き甲斐さえ与えてくれます。

虚空蔵山は、上久間に住む人々の癒しの場として、太古の昔から崇拝されてきました。秋の彼岸には豊作を祈願して、若者が鉦浮立を叩鳴らし、その祭りの音色は遠く離れた武雄地区まで響いたと言われます。

頂上の社には、人間の悟りを開くとされる「虚空蔵菩薩」を中心に、上久間・下久間の水田を潤す大堤の守り神「弁財（才）天」、豊作祈願する「稲荷」、山を守る「山の神」、明治７年３月の佐賀の乱で江藤新平族に暗殺されたわが部落の出身「中島修平氏」が祀られてあります。山頂付近には、地元壮年会が昭和49年３月、桜・つつじなど120本を植樹し、春には満開花の下で遠くの山々の景色を楽しみながらハイキングに登られる方も良く見受けられます。

また、参道の100本のもみじは平成７年、地元有志の寄贈により植樹されました。初夏の燃えるような新緑の「もみじ」の光景は、虚空蔵山でしか見ることができない絶景ではないでしょうか。

堤ノ上区　平野　昭義　著

奥は社

直近の奉納浮立（平成14年11月、弁財天300年祭）

山頂の雪景

Ⅲ. 久間の焼き物

江戸期、明治期の焼き物は日本の中でも数少ない工業製品の一つでした。大規模な生産地といえば更に数は限られてきます。その窯業地帯が久間にありました。事跡をたどっていきますと久間の大先輩たちが残していった焼き物の歴史がキラキラと光る星のように輝き浮かび上がってまいります。

1. 志田焼とは

志田焼とよばれている塩田町久間、志田皿山の窯業は18世紀初頭から始まり、最盛期には吉田皿山と並んで藤津地区窯業の中核的地位を占めていました。

磁器製品ばかりではなく、京焼風陶器や土物製品の土瓶、すり鉢等様々な製品が見られます。特に文化年間（1804年～）から幕末にかけては鍋島本藩領の志田東山、蓮池支藩の志田西山で５つの登り窯が稼働、天草陶石による大小の皿が大量に産出されました。鍋島藩内でも代表的な製品の一つで、その販路は東南アジアから日本全国に及び、皿類の生産量は藩内の過半数を超えていたものと推定されます。

明治期になると津々浦々への磁器の普及という時代状況を背景として、上久間山、上福山、美野山にも窯が築かれ全町的規模の窯業へと発展していきます。明治25年の資料では藤津地区の生産量は有田地区のおよそ2.5倍もありました。この久間の焼き物の特徴は一般大衆向け製品が主力で庶民の活力と精気にあふれた、気取らず逞しい日常性にあるといわれています。

こうした、江戸中期から始まる窯業歴史遺産が窯跡や山神社（窯業の神社）、文書、工場跡といった形で久間地区には数多く残されています。その中でも代表的な遺跡を紹介致します。

染付型紙摺花唐草文皿
（市重要文化財）

「明治四歳合諸勝志田東皿山燈」の銘
嬉野市歴史民俗資料館蔵
藤井洋介氏（北志田東山）寄贈

2. 志田西山窯

❶「西山山神」（嬉野市指定文化財）

祭神は蓮池藩初代藩主鍋島直澄。西山窯業の神として祭られているものです。西山本登窯頂上にあり、境内には安政２年（1855年）建立の灯篭や安政５年の狛犬、又、伊万里商人の顕彰碑等があって一つの社としてのまとまりが見られるところです。

写真中央の石祠は窯業の絶頂期でもあった安政年間に窯庄屋の松尾稲右衛門と言った人達が中心となって再建したものです。

藤津郡塩田郷図（江戸後期）　佐賀県立図書館蔵

❷「新山窯跡」

18世紀初めころからの窯で志田地区では最も古い窯跡。ここから西山の窯業が出発したとみることができます。甕などが焼かれていていました。1750年代には本登り窯の方に移り、新たな窯が築かれたと推定されます。

現在西山区墓地

❸「西山本登窯跡」（嬉野市指定文化財）

西山の窯業は宝永３年（1706年）頃から始まったと推定されます。蓮池藩吉田皿山代官所管轄で「私領の山」といわれていました。本格的な磁器生産が始まるのは宝暦５年（1755年）頃から。ここの窯は藩主所有の山に築かれたこともあって「蓮池御仕立窯」とも言われていたようです。又、藩は志田、吉田の製品を独自に仕入れ、大阪での販売網を作り上げていく等積極的な政策を実施しています。

西山山神登り口　右側登窯跡

土物の窯は移動する……

塩吹に抜ける道路の峠付近にあったと言われる中通り窯跡は、17世紀中頃から後半のものと推定される窯で、近辺からは土物の鉢等が採取されますが、ここの窯の陶片なのかどうかは分かりません。付近には「瓶屋が原」という地名記録も残されています。更には、「オランダ人が焼いた窯」だとも言い伝えられています。

西山最古の窯跡である新山窯跡にも言い伝えが残されています。「この窯、最初杵島郡東川登村に築かれたが、旧武雄藩主能登守、猪鹿狩を好み、猪鹿が陶器窯の火煙を恐れて山中にのがれ去るを以て、当業者一同を現在の上野村と此処（新山）に遷したものである」－久間村郷土史－と記されています。

この中通の窯と新山窯とのつながりははっきりとは分かっていませんが、最近の発掘調査によって土物の窯は時代と共に転々と移動していることが明らかになってきており、移動伝説はかなり信憑性が高いものとなっています。

尚、「オランダ人が焼いた窯」については東インド貿易会社（甕も仕入れて輸出していました）とのかかわりで解釈することが現時点では妥当なのではと思われます。

3. 志田東山窯

❹「東山山神」（嬉野市指定文化財）

山神は窯の神。東山本登窯の頂上にあって、窯業の安全繁栄を中心に生活全般の様々な願いを込めて祀られています。写真建物の左側にある石祠銘文は「山神　法性院殿祠　當山窯焼中　寛保二壬戌暦」としるされています。祭神である法性院は鍋島本藩４代藩主吉茂の院号。在位期間は1707年～1728年でこの頃から東山の窯業は始まったと考えられます。

塩田郷志田村図（寛政２年）　佐賀県立図書館蔵

❺「東山本登窯跡」（嬉野市指定文化財）

鍋島本藩領の窯で有田皿山代官所管轄。東山の特徴は江戸期を通じて甕が生産されたということ。磁器は寛政12年（1800年）から始まり、同時に甕も焼かれていました。

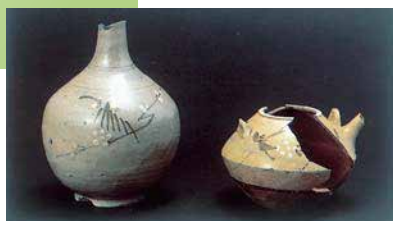
寛政２年（1790年）の絵図には部屋数21室の窯が画かれています。江戸期の地名は「志田村亀屋」。今でも焚き口付近に「ひのくち」という名称が残っています。

この窯のあった場所は西山同様領主所有の土地ですが、免税措置が取られて窯焼きの人達に提供されていました。

北志田区公民館の上　登り窯跡

（注）地図上の数字は本文見出しの番号

（左）鉄釉油入れ　江戸後期（18～19世紀）
（中）鉄釉油入れ　江戸後期（18～19世紀）
（右）鉄釉秉燭　江戸後期（18～19世紀）



（左）陶胎化粧地梅笹文瓶　江戸後期（18～19世紀）
（右）（白化粧地）草花文土瓶　江戸後期（18～19世紀）

4. 明治以降の発展

●「南志田窯」

明治15年頃に築かれた窯。型紙摺りによる日用食器が主に焼かれ、短期間で終わったようです。

明治になると鍋島藩の規制が無くなって自由に窯を築くことができるようになり、明治15年前後には、美野や上福、上久間などにも窯が新設されていったそうした時代背景のもとで築かれた窯です。この窯の頂上の敷地に明治16年（1883年）建立の山神石碑が祀られています。

東山（南志田山神）採集

●「光武の窯」

窯は久間農協前から入った道路500mほど先、右手の丘にありました。明治20年（1887年）の「藤津郡陶磁業組合人名簿」には山口友助、中嶋原左衛門、大曲佐喜太郎、田中又兵衛、中嶋森吉、坂本五平、大川内治左衛門、といった窯元の名が記されています。

また、この名簿には西山は140名、東山は57名、上久間は15名の窯業従事者名が記されています。

染付型紙摺桜樹文皿

●「熊山(上久間)の窯」

この地域には明治から昭和にかけて多くの窯跡が残されています。そもそもの始まりは明治３年（1870年）に中島信成、田中幸右衛門、貞包権七、貞包弥平次、糸山亀右衛門といった人々が金割山に窯を築いたのが始まりとされています。金割山のどこだったのか、窯跡はまだ見つかっていません。

染付梅樹文大鉢

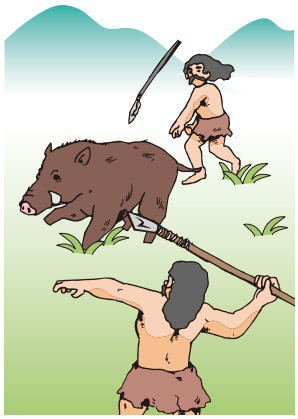
染付試験皿　「熊本一貫社製コバルト」
肥前國藤津郡熊山陶器社々員
試検人貞包栄七」の銘

それから数年後、「熊陶山社」のある麓に窯は移されています。
この陶山社にはいくつかの石碑が残されており当時の窯業従事者の名前が記されています。

西山区　青木　克巳　著

Ⅳ. 久間の歴史

1. はじめに



久間、この地がわたしたちの生活の基盤です。自然あふれる人情豊かなこの地はどのような歴史が繰り広げられ、その中でわたしたちの先人はどの様な生活を営んできたのでしょうか。今後も歴史的な資料で事実が発見されていくでしょうが、その中時代の人々の考えや生活はあまり残されていません。今後ますます消えていきます。

わたしたちは、その地域の昔話、言い伝え、風俗、慣わしなどが当時の様子を知る手がかりになると思います。それらを収集していくことで、久間の自然の中で営み続けられた先人の歴史を探訪していきます。

2. 古代の久間

久間地区においても数は少ないものの、狩猟などに用いられた石器が出土・採集され遺跡の詳細は不明だが、旧石器時代後期の二万六千年前頃には既に人々が生活していたことが推定される。

学術的な発掘調査は行われていないので明らかではないが、表面採集された尖頭器様式石器などから旧石器時代の遺跡と考えられる所は、杵島山地の飯盛山の山裾が西に延びた先端の丘陵地の標高20～30㍍の舌状台地で冬野堤の北側の台地及び志田神社の北側（元）慈眼寺の墓地に及ぶ広範囲でみられ、この時代から人々が住んで生活をしていた。

その後、縄文時代と思われる石鏃が、久間小学校のある台地や権現山、北志

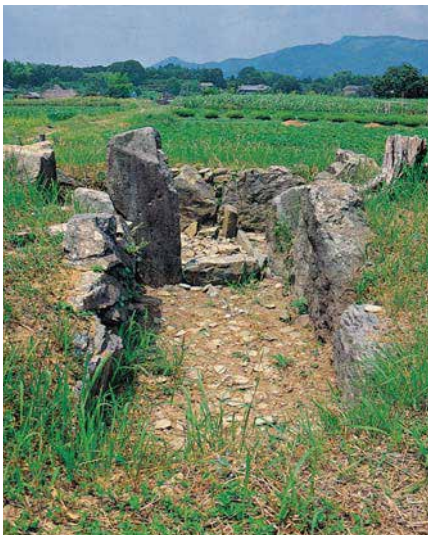
旧石器時代から縄文時代の石器（嬉野市歴史民俗資料館 所蔵）

①尖頭器
②石鏃
③石匙（さじ）

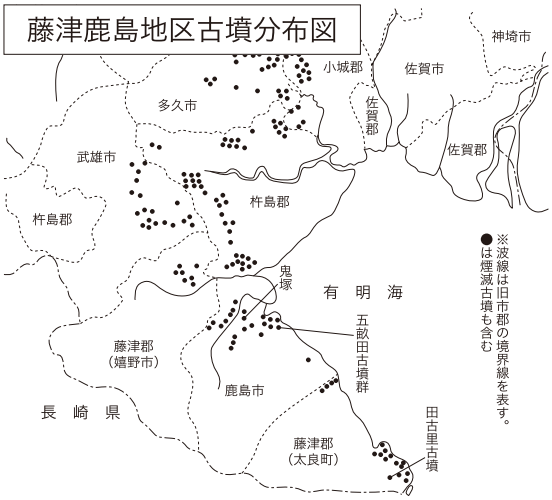
有明海の海岸の変遷

田東山等から採集され、石匙が北下久間や南下久間、代木で採集されている。

稲作が伝来し、農耕生活が起こる弥生時代には下久間と南下久間維盛社裏台地から石包丁（農器具）が発見されている。また、後者からは弥生中期の甕棺の破片が出土している。


鬼塚古墳

大和朝廷の成立から聖徳太子の摂政時代が古墳時代と言われるが、農耕集落はますます発達し、各地に富と権力を持つ豪族が起こりその墳墓である古墳が築かれた。藤津地方の古墳は殆んど後期のもので、塩田町、鹿島市、太良町に分布し嬉野町には存在が確認されていない。また、古墳分布が稀薄で農耕適地が狭隘で農耕集落の発達が妨げられていたと思われている。久間の古墳には、南下久間の鬼塚古墳、牛坂の牛坂古墳がある。



塩田町史上巻より

3. 歴史書に現れる久間

奈良時代になると現代に伝わる日本最古の歴史書である古事記、日本書紀が編纂され、地方においては歴史や文物を記した地誌（地方の文化風土や地勢等を国ごとに記録編纂して、天皇に献上させた書）の「風土記」が編纂され、写本として５つが現存している。そのなかに「肥前国風土記」が一部欠損して残っているが、これに藤津郡（現在の鹿島市、嬉野市、太良町にあたる）が記され、文献上はじめて現れる。また塩田川の記載もあり、潮高満川（しおたかみつかわ）から「今は訛って塩田川と謂う」とある。

肥前国風土記
713年頃の編纂といわれる。
寛政10年（1798年）の写本
藤津郷、塩田川について書かれた部分（嬉野市歴史民俗資料館 所蔵）

藤津郡内は四郷とし能美郷（のみのさと）、託羅郷（たらのさと）がしるされ残り二郷は不明となっているが、平安時代にできた『和名抄』には能美郷、塩田郷がみえるので能美（鹿島地区、能古見地区）、託羅（太良町）、塩田の三郷は明らかにあったと思われるが残り一郷は明確でない。

871年、藤津郡は京都の仁和寺の荘園になったと推定される。この経緯は『日本三大実録』のなかにある対馬撃ち取り陰謀事件による。以後、藤津郡はながらく仁和寺の荘園として維持されていく。（当時の資料は少ないが1119年の記録には「藤津荘を経営する責任を持っている荘司の平清澄」という記録や、1298年、藤津荘は仁和寺領とする綸旨が出されている。）

927年に成立した「延喜式」の記録では島原に通じる古代の道（官道）が杵島駅から塩田駅を通っていたとあり久間地区を通っていたと思われる。

このころの出土品として牛坂経塚、中通八幡籠経塚及び冬野古瓦窯跡（高麗瓦の窯跡と呼ばれていた）や光武須恵器窯跡が確認されている。

また、社伝では990年に藤津郡冬野村と杵島郡牛間田村の両村の氏神として牛間田天満宮が創設されたとある。

藤津・杵島は、平氏との縁が深い地域であったので、平氏滅亡とともに、多くの伝統が残っている。久間地区においては平維盛に関係する維盛社をはじめおにくまさん、牛石大明神、十郎藤の落人伝説が残っている。

（地名の呼び名は……）風土記の編纂に際しての詔

元明天皇の御世、和銅６年(713年）５月に発せられた勅令である。それまで旧国名、郡名や、郷名(郷は現在で言うと町村ほどの大きさ）の表記の多くは、大和言葉に漢字を当てたもので、漢字の当て方も一定しないということが多かった。そこで地名の表記を統一しようということで発せられたのが好字二字令である。漢字を当てる際にはできるだけ「好キ字（好きな字)」（良い意味の字。佳字ともいう）を用いることになった。適用範囲は郡郷だけではなく、小地名や山川湖沼にも及んだとされる。

したがって、文字が使用される以前から既に存在していたことが分かる。

4. 中世の久間

鎌倉幕府が開かれ、新しい政治形態が生まれた。幕府に対して、京都には朝廷があり、地方には朝廷が任命した国司と幕府が任命した守護とが並立し、荘園内にも荘園領主が任命した荘官と幕府が任命した地頭とがいて、古代的性格と封建的性格が混在していた。しかし、荘園制は武士の侵略を受けて次第に崩壊して行った。

1298年、藤津荘は仁和寺領とする綸旨が出されているので塩田地区を含む藤津地方の荘園は、鎌倉期においても仁和寺領として藤津荘は管理されていたと思われるが、その後、弘安の役で軍功をたてた大村家信が地頭となり、この荘園を基盤として成長して行った。しかし、藤津荘の崩壊は明らかにできない。

大村氏は鎌倉時代から室町時代にかけて200年間続いた。大村氏の出自系図は藤津大村氏と彼杵大村氏との関係など不明な点が多い。したがって本拠地が鹿島か大村かはっきりしない。

南北朝争乱期に『周防照円寺文書』に後醍醐天皇綸旨写しに「肥前国藤津庄内隈村惣領分」あるいは長島荘内志田村西方地頭として「隈之二郎入道西智」とある。隈村、隈とあるが久間村のことか。

室町幕府の弱体化による戦国動乱に呼応するかのように、この地でも大村氏と千葉氏（松浦党・小城）と戦いを繰り返し1476年大村氏は敗れ去り約200年続いた藤津支配は終わり、有馬氏（島原半島）の急速な勢力拡大により藤津大村氏は滅亡した。1494年、有馬氏が藤津郡を領有し、この頃藤津の武将は有馬氏に従う。以下この地の勢力争いが激化していく。地理的に隘路であるため、戦略上の重要な地点となり戦場跡も多数みられる。

1560年、有馬勢が潮見城を攻撃するが、後藤、渋江勢に敗れる。これ以降の争いで久間地区には多くの古戦場の遺跡が残される。

1563年、潮見城、有馬勢に攻め落とされる。

1576年、久間在住の地主衆七十余名、後藤氏側に就くと云う起証文を出す。

1576年、有馬氏、龍造寺氏に敗れて高木に撤退。有馬に仕えた武将たちは龍造寺氏、それに続く鍋島氏の統治に組み込まれていく。

5. 幕藩体制下の久間

天正12年（1584年）、龍造寺隆信は島原半島で島津氏・有馬氏の連合軍との戦いで敗死した。（翌年、豊臣秀吉が大軍を率い九州に乗り込み島津氏を討伐し、九州の戦国時代も終わり、秀吉と九州諸大名との間に新しい封建的主従関係が生まれる―大名領国制のはじまり）天正16年（1588年）、龍造寺政家は病弱で領国の政治実権を鍋島直茂に譲り、家督と支配が分離して行く。

このころ、塩田・藤津・鹿島地方は、直茂の兄信房（神代鍋島氏祖）、その子茂治らが支配していた。北下久間に茂治と子の織部允（おりべのじょう）の塔頭（たっちゅう）（たっちゅうさん）が残っている。

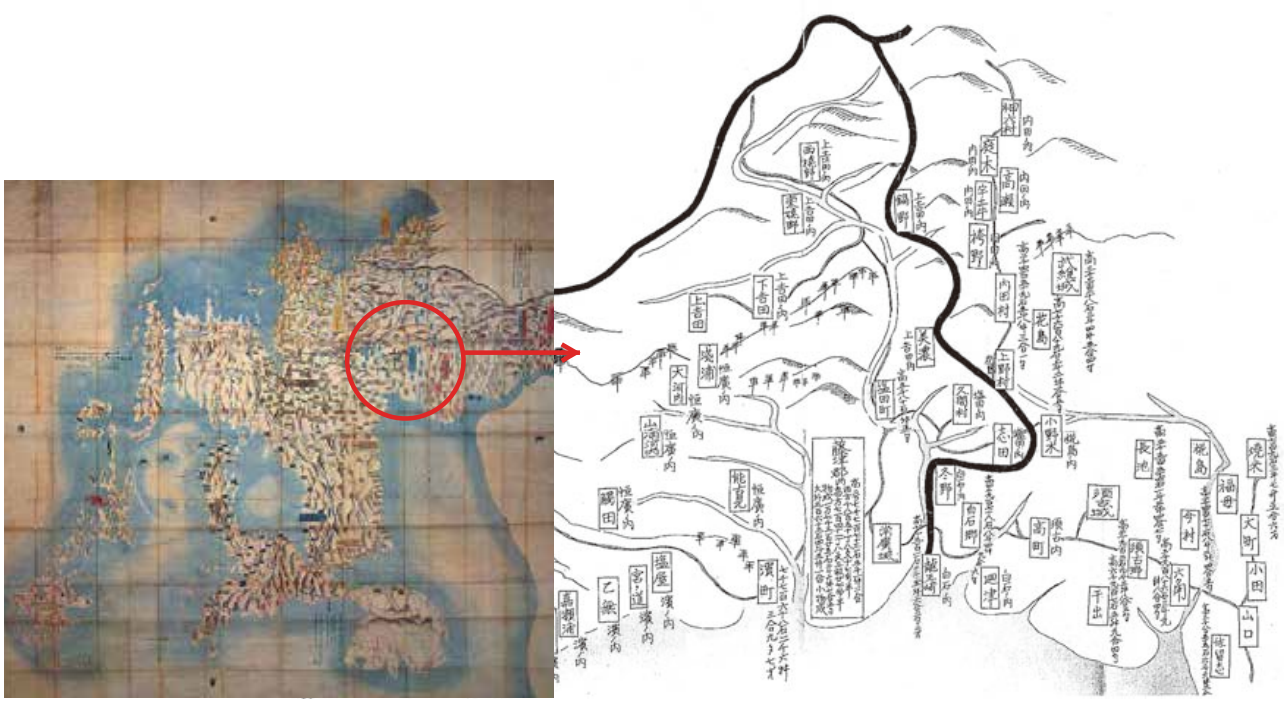
慶長12年（1607年）龍造寺隆信、政家、高房の死去により龍造寺家が断絶し、鍋島勝茂が領土を相続した。鹿島藩祖忠茂が藤津郡に一万石を与えられたのが慶長14年（1609年）で、塩田の地の大部分が直澄に与えられて蓮池藩ができたのが寛永16年（1639年）、この間塩田の地は武雄領、鹿島領、鍋島茂治（久間村）、鍋島五助領（冬野村）の配分地、及び蔵入地として変動があったと思われるがはっきりしない。

元和２年（1616年）肥前国内の各郷村の石高を表示した絵図が幕府に献上された。この絵図が作成されたのが慶長年間（1596～1614）であったので『慶長肥前国絵図』という。これによると久間村関係分は久間村、志田は塩田ノ内、冬野は白石ノ内となっている。

30年後の正保３年（1646年）に献上された『佐賀藩肥前国絵図』では、志田村、中久間村、上久間村、下久間村、冬野村、牛馬田村となっている。

絵図のほかに「郷村帳」が作製されている。文禄４年（1595年）に製作されたものから幕末まで作成され、佐賀藩内にある村の全て、枝村まで記入している。年代によってかなりの変化があり、村名だけを記録したもの、村高まで記録したものがある。

これらの絵図や郷村帳によれば、藤津郡は東分、西分に分けられ、東分には七浦郷、能古見郷、鹿島郷、西分には塩田郷、嬉野郷、吉田郷があり郷と同じ意味で庄が使われたこともあるし、塩田郷の地域が吉田庄に属していたこともあれば、塩田郷が丹生庄と呼ばれていたこともわかる。



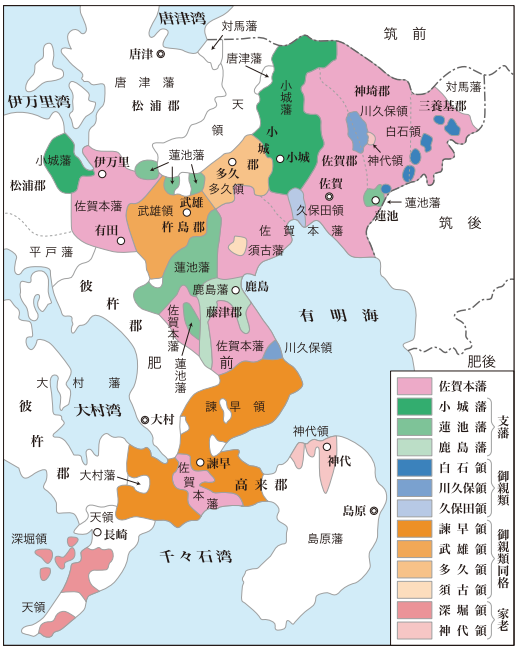
慶長肥前国絵図

鍋島佐賀藩の分家支藩体制時の久間

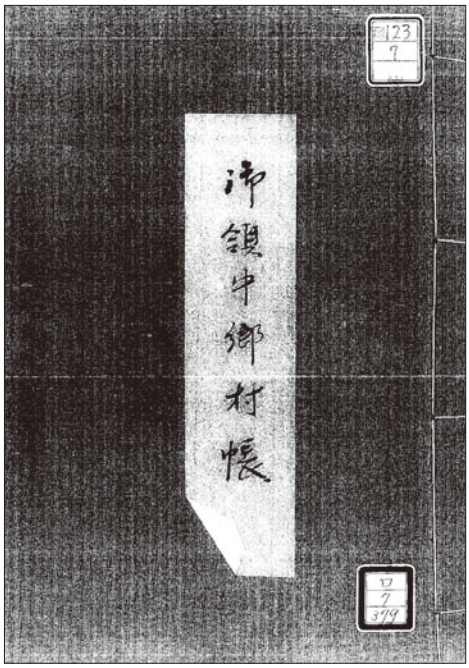
佐賀藩初代藩主勝茂が寛永16年（1639年）、三男直澄を分家させて知行三万五千六百石を与えたとき、現在の塩田町のどれだけの部分が直澄の知行に含まれていたかは明らかではない。慶安４年（1651年）に蓮池領有田郷南川原と本藩領上久間が交換されたと伝えられ、「南川原狭く、久間山広し、本藩の仁恵による」とも言われるが、久間山の範囲さえ不明である。この交換により廃藩まで続いた塩田町内の蓮池領域は、ほぼ決定したと思われる。蓮池藩創設時の藩領となった79カ村は佐賀郡、神埼郡、藤津郡、杵島郡、松浦郡に散在し、鹿島藩のように一か所に集まっていない。

藤津郡、杵島郡、松浦郡内の領地を西目と称した。

封地が五郡にまたがり不便であり、藤津郡、杵島郡からの蔵入りが多かったのでその中心部にある塩田に館（城）を築き執政しようとしたが実現していない。理由は分からないが、塩田藩が出来ていたかもしれない。



佐賀藩領図



郷村帳の複製の写

文禄４年に作製されたものから幕末のものまで、県立図書館に所蔵されており、佐賀藩内にある村の全て、枝村まで記入してある。年代によってかなりの変化があり、村名だけを記録したもの、村高まで記録したものなどがある。久間関係は上久間村、下久間村、志田村、西冬野村が塩田郷、西分塩田庄又言丹生庄の内となっており、東冬野村、牛間田村は白石南郷の内などとなっている。また牛間田村は東冬野村または深浦村の枝村となっていたりする。また地名も牛馬田村となっていたりする。

6. 村の統廃合を経て町村制へ

明治４年(1871年)廃藩置県により、村の統廃合が行われ、これにより久間村が誕生した。明治18年に編された『佐賀県・肥前国・藤津郡村誌』によれば、『志田名ノ内、字提ノ浦ノ内、戸数十六戸、人口四十五人を割キ、明治十二年八月、杵島郡大日村ニ編入シタリ。元上久間、下久間、志田、冬野ノ四村タリ。合シテ一村トシ本称ヲ用フ。』と記され、旧郷村を統合したものであった。明治22年町村制が実施され、新しい行政組織として村政が始まった。(塩田町史、武雄・鹿島・嬉野・杵島・藤津の歴史による)

V. 久間地区の今と昔

この章からは、久間地区を細かく見つめ直し、誇りを持てる地域として自覚と認識を持てるよう、各地区（13行政区）の来歴、古い地名、史跡・石造物、お祭りや行事などを取材し、記録しました。

1. 冬野区

冬野の来歴

江戸期には冬野村といい、藤津郡に属し、「布井野」とも書いた（文化３年（1806年）佐賀藩寺院帳）。杵島郡に属する場合もあった（慶長絵図では白石ノ内）。寛政８年（1796年）の村絵図によれば、杵島山南麓で、北東部と西部は山地、南西部は平地が開け、北は志田村、南は牛間田村、西は下久間村と接する。北西隅に堤があり南へ流れる川に沿って田地があり、東の山中から西へ流れる川が２本あり堤から流れる川と合流するが、流域は畑地が広がり、御山方畑も混在する集落もこの一角に存在する。

冬野堤の傾斜面に平安前期のものと推測される古瓦窯跡があり、地内一本松の墓地瓦窯跡があり、朝鮮人の瓦焼きの跡といわれ、高麗屋敷と称する地名が残る。

戦国時代には、竜造寺氏と有馬氏の合戦場となり、竜造寺氏が大敗した。

明治４年（1871年）廃藩置県により、冬野村、志田村、上久間村、下久間村が統合し久間村が誕生した。

明治15年頃（佐賀県各町村字小名取調書）によれば、久間村は上久間、下久間、冬野、志田の四つの大字からなり、冬野には一本松、下古賀、二本松、中古賀、黒木、北古賀、神水川、堤ノ上、堂徳、御前場、椿の字名がある。

明治22年町村制が施行により、新しい行政組織として村政が始まった。

御前場のふもとの冬野

「フイノ」についての聞き覚え

この地域について、記録が残っているのは元禄時代からで当時はもう60戸の集落をなしていたと聞いている。明治までは佐嘉本藩に属し白石南郷にはいって、西冬野村と言っていた。昔から（杵島）山の西側は秋と冬（陰）にたとえられ、上久間（この地域はかなり山際まで水田になっている）と違って山からの湧水がなく殆んどが山と畑で、畑には柿の木が多く、現在も残っている。また山は、本藩の御猟場（巻狩場）で鉄砲の使用が禁止され明治まで、猪に悩まされていたようだ。当時の家は山の番人の山とめさんを買収し、椎の木などを切り出し造っていた。田んぼは入江川の川筋に僅かしかないうえに、この辺まで潮が上がってきていた。そのため堤防に杭木を打って水田を広げていたが、蓮池藩の下久間とよく境界紛争を起こしていたらしい。またこの辺のちゃーばるを杭田（きいだー）といい、現在もそのように呼んでいる。その後、藩の治水事業で冬野堤（森下溜池）、大谷堤が造られ田んぼの開墾が進み、明治に神水川堤ができて現在の姿になった。（山口喜一郎さん談）

※）フイノについて、謂れについては不詳、今でも年輩の方は“フイノ”という。

最近のできごと

多目的ホール付きの公民館落成

落成式でのおんな相撲の披露

安全で安心して暮らしやすい区づくりを目指し、更なるコミュニケーションの場が必要と考え、常々よりどころとしての公民館の充実を検討してまいりました。

このたび区民が待ち望んでおりました冬野公民館の新築が、区民の皆様方のおかげをもちまして完成の運びとなりましたことに、厚くお礼申し上げます。

今後は、ここを拠点に更なる冬野区づくりに励みたいと存じます。

冬野区　山口　廣司　著

冬野地区の名勝・旧跡

高麗瓦窯跡

字一本松の墓地内に高麗瓦窯の跡があった。奈良平安時代に高麗人が瓦を焼いていたと伝えられるが、築窯の年代や使用された場所等は不明。今も付近を掘れば瓦の破片が出土する。現在は森下溜池に水没している。

冬野原古戦場

冬野一帯の地は、龍造寺有馬両氏の古戦跡地である。

時は天文十三年十一月、龍造寺隆信は、その一族家門と、有馬晴純、義直父子の滞在する潮見の長島城を襲った。

家門は頼純、常家、家宗等の部将とともに、白石より杵島山（水堂越）の険を越えて、本村の冬野へ出て、敵を背後より攻撃せんと兵を進めたが、それと悟った晴純は好適龍造寺兵とばかり、山麓に兵を伏せて撃退したので、家門の軍は散々に打ち破られ、総崩れの状態で佐嘉へ退却した。

その頃龍造寺胤直（たねただ）が重体に陥り戦死した。これと同時に家門の友軍、大河内、多久方面へ向かった者もことごとく利を失い、結局この戦いは龍造寺の大敗となった。

❶ 八天狗堂

黒木墓地に至る途中路傍に二間に三間の祠堂がある。「堂中に寝泊まり相成らず」と制札を打った処からみると、これまで乞食等の宿泊所になっていた者と思われる。

この堂宇の中心の主は八天狗さんで、寛永己天六年十二月吉日、西冬野村と刻名が打ってあるから、303年前の建立であると思われる。

❷ 神水川（しうえごう）

上久間と同じ呼び名の道徳と伝う一区画がある。

ここに神水川と呼ぶところがある。神様に奉る清水のあるところを指すのだが、古い昔からこの地に山伏の家があったのかもしれない。今でも、このへんを「神水川古賀」といっている。

❸ 黒木墓地

黒木に当村内では、比較的古い自然石の巨大な墳墓がある。

その間に存在する新しい石碑に「一番合戦伝々」の氏名を刻んだ所から見るとこれら一族の祖先の墓だとも思われる。

❹ 剣突（ケンズシ）

冬野から牛間田に通ずる、里道の天神森の付近を断ち切ったところ。ここら一帯は要塞地帯であったと思われる。現在も“ケンズシの坂”と言っている。

❺ ヤニャー

「ヤニャー」と言う場所がある。

冬野側（古戦場）から放された矢と維盛さんから放され矢が中間に集まり川に流れたと言う伝説があり、この弓矢が流れる様を見て矢流れが訛って「ヤニャー」になった説と、弓矢が飛び交う際に出る音が鳴る様から「矢鳴り」が訛った説がある。

❻ きいだー（杭田）

「ヤニャー」の北側あたりを「きいだー」といい、大雨が降るたびに杭を打って竹を編んで土手の代わりにして田んぼを川の水から守ったんだろう。

❼ 御前場（狩場）

冬野区の裏手にある杵島山が、鍋島藩藩主が猪狩りをする狩場がありそこは、殿様の前で家来たちが集まりイノシシを追い出す方法を話し合った場所を村の人達は、御前場と言っておられる。

❽ シシ囲いのシシ垣

殿様が猪狩りをされる際にイノシシが山から村に逃げ出ないように石垣を積み上げた囲いを猪垣（しし）といい、いまも山中に散見される。

山中で散見される猪垣

冬野に伝わる詩

冬野冬野と名は寂しいが、朝日差し出る冬野村

この様に冬野を詩われている。

家の玄関口に巨大な水車が

平川八郎様宅

水車製作について平川水車工房を訪ねお話を聞きました。自宅の作業場に水車工房を開き本業の仕事の合間を見て（夜なべ仕事）製作し、玄関わきに巨大な水車を玄関の中に小さめの水車が置かれています。

水車を作る切っ掛けは建築大工になって、子供のころ自転車で遊びに行った大草野で見た大きな水車を思い出して自分で作ってみようと思い、自分なりに図面を引き製作に取り掛かったそうです。

材木を集め乾燥させて各パーツを作るまでに１年以上の時間がかかり、全パーツを揃えて組立に取り掛かり完成するまでに１年半。

最初の一基は、材木集めから製作完成までに３年以上がかかったそうです。木材が欅（けやき）の木の為高額で品薄で大変でしたとの事で今後は、ヒノキや杉の木などの材木を使用しなければならないだろうとのことでした。

今後の夢をお聞きしましたところ、塩田町を水車の里にし、長崎街道の塩田津街並みや町の至る所に水車を設置して、昔のような陶石を砕く水車の音が聞こえて来そうな塩田の町にしたいと熱く語って下さいました。

冬野女相撲について－今も伝承芸能

山口信義・和子氏ご夫妻に伺いました。江戸時代冬野は鍋島藩の本藩であった為に鍋島のお殿様が猪狩りに冬野の里山に来られ、（狩場を御前場と言っている）、その時山から下りて庄屋さんの家で休憩されたおり、女性たちが踊っておもてなしをしたのが始まりでないかと言い伝えられてきているとのことでした。今から300年前この地が白石南郷西冬野村の頃です。

冬野女相撲甚句が現在の形になったのは、女相撲保

存会が出来てからであり、それまでは、甚句歌と踊りだけが行われていたが、当時の区長さんで山口操氏の肝いりで生産組合長、公民館長、区の役員さんたちが保存会を立ち上げられ、このころから相撲を取り組むようになりました。以来代々引き継がれているもので、この女相撲甚句は、作物の豊作を願い収穫の喜びを表したもので、豊作の祭りや村の慶事の際行われていたとされている。

最近では、お祝い事やお祭り以外でも活躍されていてテレビの番組出演や、イベントにも出かけられています。最近では有田町で開催された有田炎博覧会の出演や大相撲九州場所の折二所ノ関部屋に招待され、高見山関と一緒に写真にうつり関取り衆とちゃんこ鍋を囲み食事をした事など思い出がいっぱいと話されていた。

塩田町史下巻によれば以下のようにあります

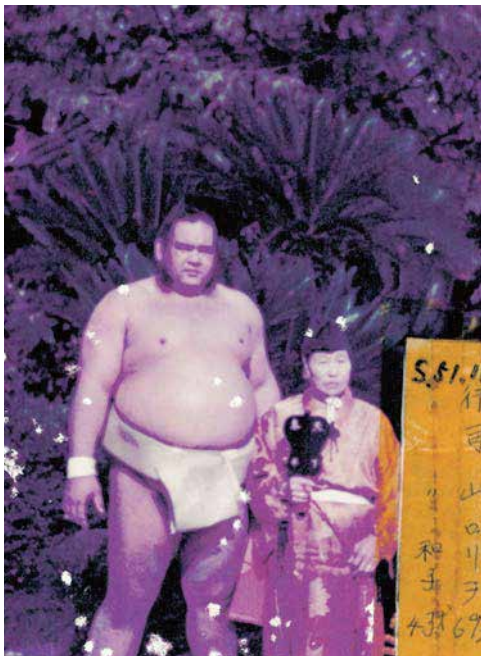
冬野女相撲は、今から300年前冬野部落が、白石南郷西冬野村と呼ばれていた頃始まったとされ、以来代々引き継がれているもので、この女相撲甚句は、作物の豊作を願い収穫の喜びを表したもので、豊作の祭りや村の慶事の際行われていたとされている。

（塩田町史下巻より）

初代横綱
田島米子様

横綱土俵入り誕生秘話

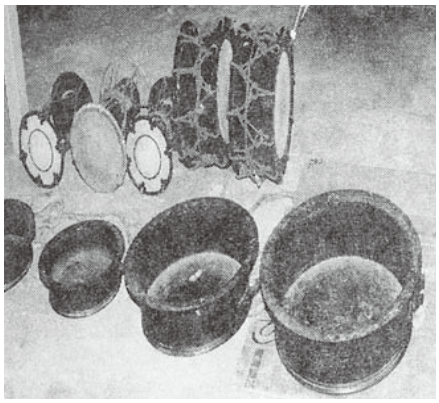
山口信義氏の仕事先での話・家お越しの仕事が終わり、落成式の酒席の話で土俵入りが出来ないので横綱を作れないと話をしたら、当家の方が雲竜型の土俵入りを知っているとのことで、田島米子さんが習い初代横綱が生まれたと話してくれました。



高見山関と山口リヲ様

高見山関と山口和子様

冬野区に現存する文政８年製の浮立鉦

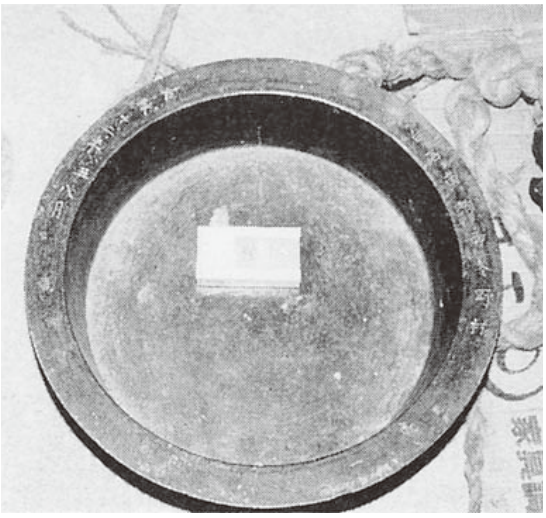

現存する冬野の鉦浮立一式

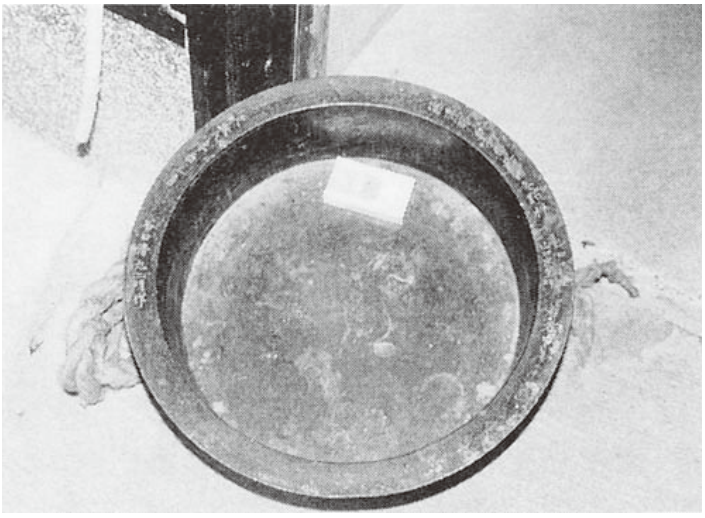
文政年間に鋳造された古い鉦浮立、５丁鉦がある。そのうち二番と地鉦が最も古い。二番鉦は直径41.5㎝あり、その刻銘に藤津郡白石南郷西冬野村　山口長助　山口定右衛門　若者中　文政八年酉三月谷口清左衛門作とある。この年は西暦1825年で今から173年以前に造られたものである。

同じく２丁の地鉦は径24.0㎝で白石南郷西冬野村　若者中　文政八年酉三月の銘があり、当時佐賀長瀬町のあった谷口清左衛門の鋳造所で同時に造られたものと思われる。佐嘉本藩領であり、その地名も白石南郷西冬野村と稱されてた。

以下この冬野区保存の５丁鉦及び大太鼓の銘記を一覧にして記す。

大鉦直径52.0㎝	藤津郡西冬野村		明治九年子八月	谷口清八作
二番　〃　41.5㎝	藤津郡白石郷西冬野村	山口長助　山口定右衛門　若者中	文政八年酉三月	谷口清左衛門作
三番　〃　35.5㎝	白石南郷西冬野村		文政十二年丑八月	
地鉦　〃　24.0㎝	白石南郷西冬野村		文政八年酉三月	
（二丁共）	若者中			
太鼓　〃　52.0㎝	弘化四年未六月吉日細工人杵島郡須古牛田村　太鼓屋　伸助			


三番　文政十二年丑八月


地鉦　文政八年酉三月

2. 南志田区

南志田区の来歴

明治18年（1885年）に編纂された「佐賀県肥前国藤津郡村誌」によると、当時の村は、次のような郷村を統合されて久間村となった。

久間村は、元上久間村・下久間村・志田村・冬野村の四村が統合されたものである。志田村の字地名は、志田原・白久保・天神篭・明神篭・東山・椿原・平ケ倉・提の浦・坂下・山の木（明治十二年八月に志田名の字提の浦のうち十六戸四十五名を杵島郡大日村に編入とある）今の南志田区は、志田原の一部・椿原・平ケ倉・観音谷をさしている。

塩田町史下巻より

今も残る古賀名

平ケ倉古賀・馬場古賀・神古賀・観音谷等の古賀名が今も使われている。

南志田区のお祭り

7月14日　志田神社の夏祭り

7月20日　平ケ倉灯籠まつり
（岩権現神社に馬頭観音が祀られている）

8月17日　志田原観音さんまつり
（道しるべ水堂）

8月31日　風神日の鉦浮立

11月3日　志田神社のおくんち

昭和30年初期のおくんち風景

国道より南志田地区の入り口（旧冬野入口より北へ100m位）に道しるべ水堂と言って志田原観音が祀ってあり、地区の人達は８月17日にお祭りをしている。

この観音さんは、長崎街道より水堂さんへの、道しるべで山の道沿いには、いくつものお地蔵さんがおられたが、道路や土地改良工事・堤の工事等に伴い上へ上へと移動させて行ったために産社（さんやしろ）に首なし地蔵さんも一緒に祀られている。水堂さんの出水法要の頃に参拝者に街道沿いで村の人達が店を出して饅頭やところてんなどを売っていて、参拝者で賑わっていたと地区の人達は、お年寄りたちから聞いたと話されていました。

道しるべ観音

志田の鉦浮立

８月31日の風神日（ふじん）に鉦浮立を打ち、地区内を回り家々の角先で鉦を打って口上を上げて、お花（ご祝儀）を頂いて回った、これを当時は、ぜんもん浮立と言っていたと地区の人達の話でした。

志田の浮立は、150年の歴史があり、名取の名物と言われた、指導者の川原安之助さんによる厳しい稽古がされ志田の男たちに受け継がれていった。

年月が経過するにつれ村の若者たちが職を求めて村を出てゆき次第に衰退して行ったのを、初代青壮年部長の小林卯八さんらが伝統を無くしては、いけないと立ち上がり今に至っている。

（田中肇氏・小林卯八氏・杉光為雄氏・外数名の談）

南志田区の皆さん

岩厳現神社

椿原の耕地整理

椿原（椿の山）は、江戸時代に開墾された開拓地で椿の木を植えられたところから椿原と呼ばれたのでしょう。この地を、明治42年より椿を切り倒し水田にするために耕地整理が行われた、今も棚田として耕作されている。

工事期間は、明治42年１月より大正５年３月まで

工事経費は、当時の金額で38.000円で現在の金額で１億4.440万円

工事面積は、18町３反２畝（約18.3ヘクタール）

椿　原

お滝さん

横山（杵島山）の麓に土地の人々が言っているお滝さんと言う小さい滝があり滝壺には、座禅を組み滝行をした岩が残っていたと言われていたが、大雨などで流された様で今回は、発見できなかった。

以前は、滝のそばに１件の家があり光武弥一さんという方が住んでいて病などを治すお祓い（祈祷）をしていた。又ここには、御不動さんが祀ってあり年１回お祭りがあり白装束で滝に打たれていたが今は、行われていない。

慈悲山・慈眼寺について

南志田にある慈悲山・慈眼寺は、浄土宗の寺であり、佐賀寺院帳によれば、杵島郡錦江村飯盛山福泉寺末寺と記されています。

蓮池藩二代藩主鍋島直之公を開基として創建された由緒あるお寺であります。寺には直之公の位牌、「要玄院殿前摂州大守了関宗勇大居士」が、祀られています。

石叟総和尚は、寺の再興に努力されたと語りつがれています。

慈眼寺は、久間小学校発祥の地と言われている。今でも、慈眼寺境内に久間小学校発祥の地の記念碑が建っています。

久間村には、江戸時代、椛島宣一、川浪彦右エ門、外尾勘三が寺子屋を開き子弟の教育に当ったと伝えられています。椛島宣一が志田村慈眼寺に寺子屋を開いたと考えられる。

森　敏治　著「塩田昔話」より

村の人の話によれば

慈眼寺建立当時の御寺には、手すりの付いた廻り縁が有り裏には、井戸があり洗い場・飲み水用の池が有り、又入口には、大きな２本のけやきの木が鎮座していたとの事です。

現在の慈眼寺は火事により焼失したので昭和22年頃建て替えられた。

久間小学校の変遷

江戸時代、寺子屋、塾、藩校等で読み書きソロバンを学んでいた。明治５年に学制が敷かれ教育が行われました。

明治維新の指導者の一人岩倉具視は、（教育こそ国家建設の根本である）と述べています。

塩田郷で、一番最初に出来た学校は、谷所小学校で「谷所尋常小学校沿革誌」に記されている。

ところで、久間小学校は、南志田慈眼寺庵に寺子屋として江戸時代に始まり明治８年に志田小学校として慈眼寺を校舎として開校し志田小学校教育首座（現在の校長）に桃島宣一が就いている。その後明治10年西山に校舎を新築し移転して志田小学校として発足する。初代校長に桃島宣一が就任している。

森　敏治　著「塩田昔話」より

明治19年10月	尋常志田小学校と改称
明治20年頃	上久間村に尋常久間小学校設立
明治28年５月	合併久間尋常小学校と改称（上久間の久間尋常小学校は分校になる）
明治37年10月	志田原に新築移転
明治44年４月	高等科併設久間尋常高等小学校となる
昭和16年４月	久間国民学校と改称。
昭和22年４月	新学制により久間小学校と改称。

昭和４年に、斉藤利治作詞により校歌が制定されました。（旧校歌）

朝日拝む、歌垣の
杵島の山は、大古（おおむかし）
国の基礎（いしずえ）建てさすと
木の実おろせし　御山なり

久間小学校創立百周年記念誌より

老人会女性達のおもいで話

昔懐かし食べ物とおやつ

戦後間もなく、開拓が始まった頃は、陸稲を作って食べていた。（畑に作る稲のこと）また、水堂さんに行く道の処の溝の淵にやまふきが生えていたので田植え前に取り干して蓄えて５月のシャーにしていた（田植え時期を５月と言う。シャーは、おかずのこと）。桑の実や、しいかいかい（すかんぼ）、山の木の実等を、お菓子代わりに食べていたと言われていました。

南志田つくし会

昭和35年よりもともと有りました若妻会を「南志田つくし会」として江湖ミヨ様を会長に始まり、公民館でお食事会をしていた。（今で言う女子会）

当時公民館には、台所が無かったので徳永様の家で料理作った事も有りました。

これより５年ほど続きましたが自然に消滅して行ったそうです。

3. 北志田区

北志田区の来歴

明治18年（1885年）に編纂された「佐賀県・肥前国藤津郡村誌」によると当時の元上久間村・下久間村・志田村・西冬野村の四村が統合されて久間村となった。

統合前の志田村は、志田原の一部・白久保・天神篭・明神篭・東山・椿原・平ヶ倉・坂ノ下・銭亀（瓶）・亀屋・山ノ木・提ノ浦（明治十二年八月に志田名の内字提ノ浦の内十六戸四十五名を杵島郡大日村に編入したり）とある。

今の北志田区は、坂ノ下・東山・提ノ浦（ヒサゲノウラ）（一ノ割から六ノ割）・亀屋（一ノ割から二ノ割）・銭亀（一ノ割から三ノ割）・慶首（頸首）・明神篭・天神篭（明神篭と天神篭は南志田とに分かれている）等の地区を指しているようです。

今も残る古賀名

来歴でも述べた地区名が今も古賀名として残っている。（東山・提ノ浦北（ヒサゲノウラ）・提ノ浦中・提ノ浦南・銭亀・石橋等）

北志田区のお祭り

7月12日　庚申さんまつり（旅の神さん）
7月13日　山ん神さんのまつり（東山陶山杜）
7月14日　志田神社の夏まつり（南志田と交代で担当）
8月　9日　猿田彦を祀る、とうやまつり
8月19日　観音さん灯籠まつり
8月24日　お地蔵さん灯籠まつり
8月31日　風日（かざび）
9月15日　八幡さん灯籠まつり（八幡大菩薩・文政元・正一位稲荷大明神）刻んだ祠がある
11月　3日　志田神社おくんち（南志田と交代で担当）
12月25日　堤祭・大祭（水温祭とも言う）

昭和のころの“とうや祭り”

◆ とうや祭り
地域の方たちが地蔵堂に集まり大きな輪の御珠珠を御念仏を唱えながら珠一つづつ送り回し中に一つだけ大きい珠がありその珠が回ってきたら頭の上に持ち上げて拝みそれを夜明けまで続ける。

◆ 堤祭・大祭（水温祭）
12月25日　縄に御幣さんと“いわし”を30匹位つけ、志田神社でお祓いをしてから、南志田の平ヶ倉堤・椎久保堤、北志田の提ノ浦（ヒサゲノウラ）堤の各石碑にくくりつけて安全を祈願する。

水温祭

北志田区の名勝・史跡

❶ 馬洗い川

留守殿森のすそのを流れる川を馬洗い川と言い、また馬洗い場があり村の人々が農耕用の馬を洗っていたが、現在は圃場整備のため無くなった。

❷ 留守殿森（るすどののもり）

北志田には、「留守殿森」と呼ばれる森があり、神無月に神々が村を離れて留守にされる間、この森の神様だけは残って、村をお守りされていたとの伝説が残っている。又今では、土地の人はなまって（ぬすどの森・ぬすどんもい）と言っておられる。
森の頂上に「庚申さん」と「猿田彦」が祀ってある。

留守殿森

左：庚申（こうしん）　右：猿田彦（さるたひこ）

◆ 庚申（こうしん）さん

かのえさるとも読む、親しみを込めて庚申さんと呼んでいる。
庚申の日に当たる日の禁忌行事を中心とする信仰で本来は中国道教の祭典。中国では、道家の説として庚申の夜、人の体の中にいる三尸虫（さんしちゅう）という虫が人が寝ている間にひそかに昇天し天上の至高神その人の罪過を告げるというのでこの夜は眠らずに三尸虫が逃げ出す機会を与えない様にする風習がある。この夜眠らないことを守庚申という。この説の起こりは多くの説がある。
何れにせよ一貫しているのは、この夜はつつましくして眠らずに過ごすという思念で男女同床せずとか、結婚を禁ずるとか、もしこの日に結ばれてできた子供には盗人の性格があると恐れられたという言い伝えがある。

（世界大百科辞典より）

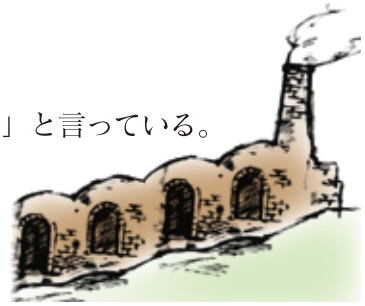
◆ 猿田彦（さるたひこ）

日本神話の1神格で、天孫ニニギノミコトが日向に下るとき天の八衢（あめのやちまた）に迎えて高千穂峰まで案内したとされた旅の神様と言われるゆえんである。一書では伊勢の五十鈴川（いすずがわ）上に至り鎮座した、やがて、そこに皇大神宮が来る縁となったと伝える。
猿田彦は、サルを擬人化したもので幼児の形に考えられた神様の遊び相手とされていたと、ここから発展した神話であろうとある。

（世界大百科辞典より）

❸ 火口（ひのくち）※地元では“ひぐち”という

下記の亀屋の窯の焚口が並んでいた処から、今でもこの付近を「火口（ひぐち）」と言っている。



❹ 山神（山ん神さん）

地元では、山ん神さんと言い、窯の神で東山本登窯の頂上にあって、窯業の安全と繁栄の願いを込めて祀られたもの。左の石指名分は『山神　法性院澱祠　當山窯焼中　寛保二壬戌暦』。祭神である法性院は鍋島本藩4代藩主吉茂の院号である。

❺ 亀屋（瓶屋）

寛政2年（1790年）の絵図で瓶を焼く部屋数が21部屋もある窯があり江戸期の地名で〈志田村亀屋〉というところがあったとされる。

❻ 城山（城跡）

庚申さん・猿田彦・お地蔵さんの地蔵堂の裏山を城山と言って武雄城の出城があったとされる。長崎街道の見張りをしていたのであろう。頂上には八幡さんが祀ってある「八幡大菩薩　文政元」「正一位稲荷大明神　武雄城」と刻まれた二つの石碑がある。

八幡さん

地蔵堂

城山

❼ 三段岩の石仏

提の浦地区の裏山のうっそうと茂る山肌を登る事30分ほどの処に仏様が彫ってあり、そばに御不動さんが鎮座している。また、ハートの形をした御手水鉢がある。

石仏群

御手水鉢

塩田新四国奥院

❽ 郡境石

留守殿森の前を通る長崎街道を北へ進むと藤津郡と杵島郡の郡境に出る。そこに角柱石が建っていて　従是　南　藤津郡　北　杵島郡と彫った郡境石が建立されている。これは、重要な境石であって、「藩では巡見使が通られるときは、草を払い掃除をして刻銘には墨を入れるよう命じていた。」との記述がある。その為今でも地域の方達は清掃を続けておられる。

郡境石

◆ 慶首（頸首）

慶首と言う地区があるが、地域の方たちによると、戦いで打ち取った敵の首を下げていた場所であったであろうと言われている。本当は、「頸首」の字を使うのであろうが、あまりにも惨いので「慶首」を使ったのであろうとのことでした。

◆ 東山本登窯跡

東山の窯業は本藩4代目藩主吉茂の頃（18世紀初期）から始まったと推定される。
有田皿山代官所管轄で東山の特徴は江戸期を通じて瓶が生産されたということである、磁器は寛政12年（1800年）から始まるが同時に瓶も焼かれていた。

◆ 新登窯跡

文化8年（1811年）以降に築かれた窯で本窯に対して新登と言われ磁器と瓶が焼かれていた。

参考資料　塩田町史上巻・青木克己氏・江口浩氏・北志田地区の皆さんのお話より

馬の蹄に蹄鉄を打っているところ

◆ 川原鍛冶屋

川原兵一氏が、国家試験の「蹄鐵工免状」を大正15年に取得し鍛冶屋を始められた。当時馬は馬車を引いたり、田んぼを耕したり、山から木を胴引きしたり活躍していた時代だったので、馬の蹄鉄作成から取替をされていた。

当主は非常に器用な方で、馬車・車力・車輪のタイヤ部分も製造されていたと言う。

晩年は需要も少なくなり、藤津郡の小中学校はもとより黒板を製造し、馬車・車力で納品していた。当時の面影はないが『箱鞴（はこふいご）』（写真）が残っている。

箱鞴

平成10年10月　子供クラブ浮立（志田焼の里秋まつり）

4. 西山区

西山区の来歴

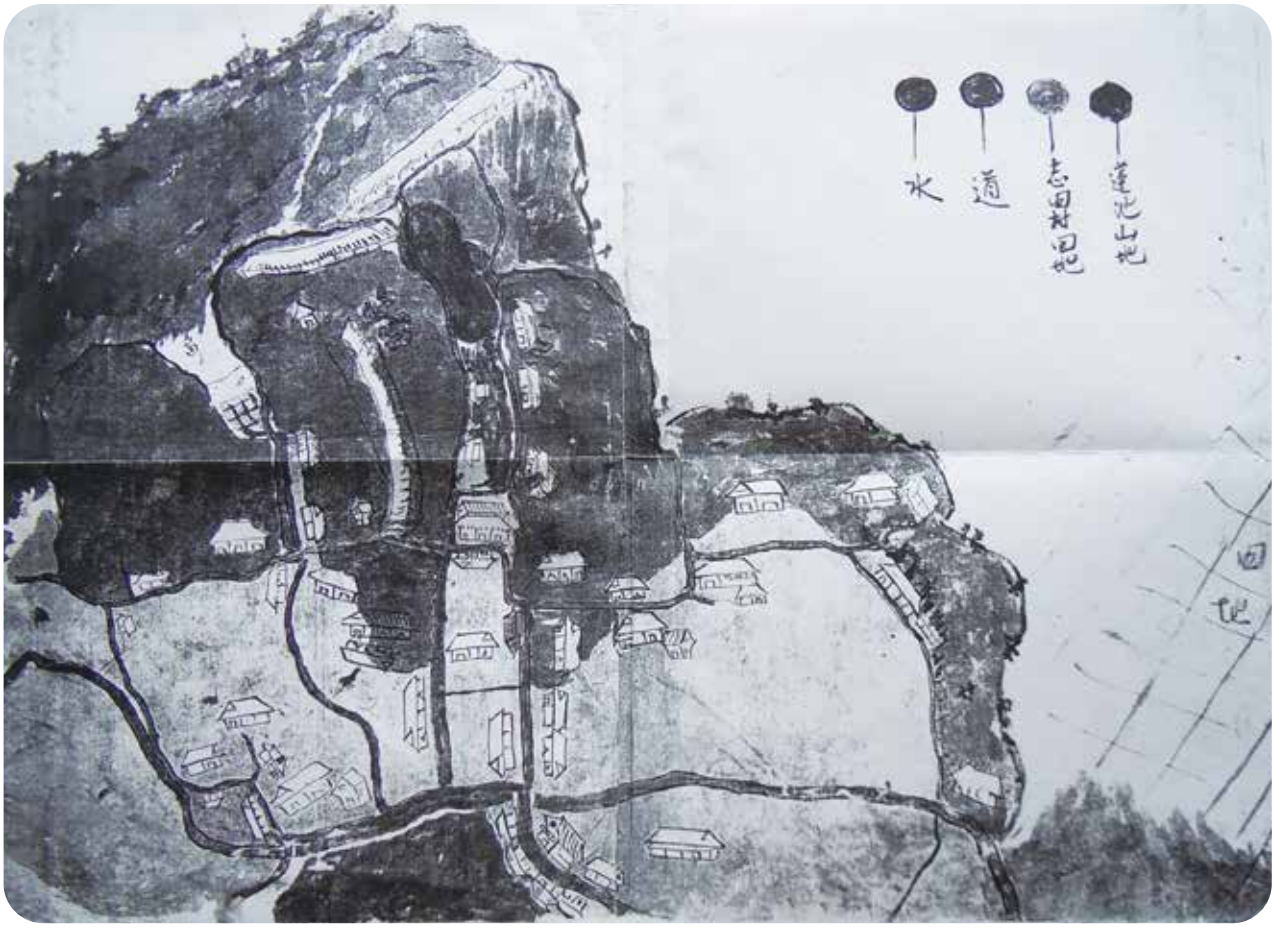
江戸期西山地区は、塩田郷上久間村のうち、志田皿屋と後川内（ウシロガワチ）からなっていました。

志田皿屋には、代木・もぐら谷・たに・そうば谷・小ヶ倉・さる渡（現西山団地）等が有ります。

後川内には、金地（カナヂ）・八畝田（ハッセダ）・番宅などの小字名が有ります。これらが現在の西山区をなしています。

なお、明治４年、上久間村・下久間村・志田村・冬野村の４村が合併して久間村となりました。

「西邕戸口帙（せいようここうちょう）」より



西山窯図（江戸後期）

今も残る古賀名

石橋・代木（ダイギ）・上古賀・中古賀・下古賀・後川内・新山（シンヤマ）古賀・前古賀・金地古賀・西古賀・東古賀等が今でも使われているようです。

現在は、班制で運営されています。

西山区のお祭り

4月13日　山ん神さんまつり

（七つの窯屋で、「車おろし」※ を行っていました。）「車おろし」は、次の七つの窯屋で行われていました。現在は志田会社のみで行われています。<永田窯・香月窯・藤井窯・松浦窯・重松窯・平野窯・志田会社>

※「車おろし」とは、年末年始に神棚に飾っていたろくろ（車）を下ろして仕事始めをしていた習慣に由来するもの。

7月15日　祇園さんまつり

◆ **西山祇園社**

寛政11年己未（1799）216年前の建立です。

願主

西志田山中　釜庄屋　杢兵衛

塩田町　小池百助

と刻されています。

祇園社は京都八坂神社が本社であり、盛大な夏祭りで知られ、また防災除厄の神として知られています。

1 現在の祇園社（祇園さん）

江戸時代に西山の釜焼中の方々が建立され、現在も西山地区の方々がおまつりをしておられます。

境内には、文化12年建立の金比羅大権現、文政4年建立の辨財天、明治10年建立の神武天皇、昭和7年建立の太神宮等がまつられ、明治39年建立の日露戦役記念碑もあり戦死された方々の名を刻しています。弘法大師その他の石仏もまつられています。

7月15日　伊勢庚申さんまつり

7月15日　神武さんまつり
（神武天皇を祀る）

7月20日　恵比寿さんまつり

◆ 恵比寿さんまつり

　恵比寿（えびす）は七福神の一神として、大黒とともに財福をさずける福の神の代表として知られている。

　その事から地域の人々は、商売の神さんとして恵比寿さんとよんでお祭りをしていた。

❷ 恵比寿堂（恵比寿さん）

8月17日　観音さんまつり

❸ 観音堂（観音さん）

8月23日　三夜さんまつり

◆ 三夜さんまつり

（演劇や地区の人の踊りなども行われていました。）踊りは、東千代之助《東映スター》に習う事もあったとのことです。（地区のお年寄りへの聞き取り調査による。）

※八幡宮を脱退するまでは、おくんちで子供みこしを引いていたが、今は脱退したことで区の運動会を始めました。

❹ 三夜さん跡

西山の名勝・史跡

新山窯跡

5 窯のおもかげ（新山窯跡）

志田地区で最も古い窯跡で、18世紀初め頃からの窯で甕などが焼かれていました。西山窯業の最も古い記録は延享３年（1746）蓮池藩「請役所日記」の中に出てきます。

「中嶋弥六兵衛の吉田皿山方の役職を免じる。山方と後河内焼き物方は今までの通り。」

とあって「後河内」という地名が出てきます。この頃は新山窯で焼き物作りが行われていたと推定されます。

西山本登窯跡（嬉野市文化財）

西山の窯業は、宝永３年（1706）頃から新山で始まったと推定され、蓮池（はすのいけ）藩吉田皿山代官所管轄で私領の山です。本格的な磁器生産が始まるのは、宝暦５年（1755）頃からで、この頃に新山からこの場所に移動してきたものと考えられます。

窯は、藩主所有の山に築かれたこともあって「蓮池御仕立窯」とも言われていました。また、明和４年（1767）藩は、志田、吉田の製品を独自に仕入れ、大阪での販売網を作り上げていく等、積極的な政策を実施しています。当時の記録「請役所日記」には次のように記されています。

窯のおもかげ

6 西山本登窯跡

「この度、吉田志田陶器を（藩が）仕入れて毎月大阪へ送るようにとの申し付けが藩主からあった。そのことについて、借り船ではよろしくないので、大阪で600俵積の船を新たに調達した。」

西山陶山社（山ん神さん　嬉野市文化財）

蓮池藩の初代藩主である鍋島直澄公を祀る「山ん神さん」があります。社祠の刻文に「干時安政二乙卯三月吉祥日再建」とあり、今から約160年前の安政２年（1855）にこの地に再建されたものです。また、この時期は、ここの灯篭や狛犬などの寄進者としてその名を刻まれている浦川仁右衛門ら地元窯焼中の並々ならぬ努力は勿論、伊万里商人 横尾武右衛門などの支援により、志田西山の窯場が再び活況を取り戻していました。

7 西山陶山社

水神社（嬉野市文化財）

8 水神社

水神

「水神 文化十一年」（1814）の銘が刻まれており、磁器土の原料である天草石で作られている珍しい石碑です。有田の陶石である泉山石は本藩の独占物で、蓮池藩の西山にはそれを分けてくれませんでした。そこで西山は天草石で磁器を焼いていました。

通称、金地という所に小さな祠あり、天草陶石の「水神さん」が祀られております。なお、大師像も並べて祀られています。

第３紀層

第３紀層が露出しており、中学生が郊外授業で訪れます。７千万年前から百万年前（第３紀）にできた地層です。

その頃に造山活動が盛んでアルプス・ヒマラヤ等の大山脈ができあがり、日本列島の形もこの時代に造られたと言われています。

9 第３紀層

高砂会（老人会）の思い出ばなし

◈ 西山商店街

西山の製陶業が盛んな頃、当時は西山商店街は何軒もの商店が立ち並ぶ繁華街でした。（豆腐屋・饅頭屋・瀬戸物屋・下駄屋・床屋・酒屋・米屋・呉服屋・和菓子屋・素麺屋・畳屋・すさ屋・綿屋・箱屋・御座屋・精米所・魚屋（２軒）・共同風呂・久間駐在所・久間郵便局・医院・蒟蒻屋・鍛冶屋・７軒の窯屋等が有りました。また、三夜さんの入口に三角塔の時計台も有ったとのことです。

◈ 久間郵便局について

久間村では明治36年12月西山郵便取扱所が設置され所長に宮崎遅吉氏が任命されました。その後、明治38年４月１日久間郵便局と改称され宮崎淳氏が初代局長に任命されました。（昭和22年３月から昭和36年９月まで、電話交換事業も行なわれていました。）　　塩田町史下巻より

◈ 田中鍛冶屋

西山には、今でも当時の機械工具一式を使って営まれている鍛冶屋があります。現在の鍛冶師　田中武夫氏は、昭和28年頃から農具（鍬、鎌、鉈など）、家事用具（各種包丁など）の製作・修理に勤しみ、一日に30丁ほどの製品を仕上げていたとのことでした。この鍛冶屋は、今でも注文を受けているとのことです。

作業風景

5. 光武区

光武区の来歴

江戸期光武地区は、宝暦二年（1752）の郷村帳によると、塩田郷上久間村のうち、字後山・藤原・牛石・代木等からなしていた。光武区の名前は、「平家の殿様が光武氏の先祖の家を訪れ、この地を**光武**と名付け、この屋の屋号を**光武**と名乗るように申し付け、更にこの辺りを平家の名にちなんで**平古賀**と名付けた」と伝えられています。（光武虎登氏の談による）

今も残る古賀名・地名

平古賀・代木・中渡・北古賀・南古賀・後山・藤原等がある。

古い地名

【なんじゃだん（谷）】

下古賀から「おにくまさん」へ通じる一帯

【そうばだん（草場谷）】

旧久間炭鉱の北側の谷一帯

【でいのうち（堤の内）】

光武つつじ園から中久間へ通じる市道の北西一帯

【はっせだ（八畝田）】

「牛石さん」の前方にある八畝ほどの田圃。牛石さんにお供えするためのもち米を収穫するため、苗を持ち寄って耕作していた。

お祭りと行事

1月吉日　初観音講

観音講は、以前は年に４回行っていたが、勤務形態等の変化により、１月17日の初観音講だけが続けられている。後山上古賀地区にある地蔵堂の中に数体の石像があるが、その中の一体が観音様ではないかと思われる。

今は、初観音講も１月17日にとらわれず、当番の都合により日曜日に女性が集まって昼の飲食を楽しんでいる。

（30数年前に地区の人から聞いた話）

1 地蔵堂

２月15日　花炒り15日

陰暦２月15日は釈迦の入滅の日にあたり、日本や中国などで勤修される釈迦の遺徳追慕と報恩のための法要である。この地区では、女性たちのお祭りとして稲の籾を釜で炒り、花のように開いた米をお話をしながら食べていた。今で言う女子会である。（喉にひっ掛かって美味しくなかったとのこと）

３月と９月の彼岸の中日　彼岸ごもり

地区の女性たちが地蔵堂や公民館に集まり、大きな数珠をお経をとなえながら送り回して夜を明かしていた。後山地区では、現在、春と秋の彼岸巡りのお接待を行っている。

2 祇園さん

◆ 祇園さん

天皇信仰の一つで京都八坂神社・牛頭（ごず）信仰に始まり火災・飢饉・疫病の発生を収めるために祇園信仰が日本全国に祇園宮を建立して祈願するのが広がっていったとされる。祇園さんまつりとして現在でも日本各地で神輿や山鉾・山車などを市中を引き回しで祇園まつりが行われている。

（世界大百科事典より）

７月24日　祇園さん

以前は、南古賀にある祇園さんまで鉦や太鼓を打ち鳴らす浮立を仕立てて登り、踊りを奉納していた。

７月24日　天神さんまつり

光武地区においては、光武公民館の敷地内に以前地区内に点在していた神様や石の祠を集めて祀っている。後列左より風神さん・山神さん・天神宮・金毘羅社・左端の祠に宮地嶽神と天満宮と判読不明の文字が一体に刻んである。前列左に天照皇大神（あまてらすおおみかみ）・右に猿田彦（いせこったん）が祀られている。以前は、この場所で子供奉納相撲や浮立を奉納して天神さんまつりをしていたが、現在は子供会のバーベキューをする程度である。

3 天神さん

左より山神さん、天神宮、金毘羅社

8月上旬　夏祭り（お地蔵さん・さんやさんまつり）

後山地区では、７月の終わりと８月の初めに、お地蔵さんとさんやさんで子どもたちの演芸会を催していた。現在は地域でバーベキュー会を開いている。

4 さんやさん

八幡宮に奉納

9月1日　かざび（風日・風神日）

二百十日の前夜に浮立を仕立てて八幡宮に奉納し、帰りに地区の家々を回っていた。現在は、区の役員で公民館でお祭りだけをしている。

かざびの様子

家々を回る浮立

10月15日　御日待ち（おひまち）

天照皇大神（あまてらすおおみかみ）を祀り、お日さまに感謝してお日さまを休ませるお祭り。太陽の出る前に餅をつき野菜や果物と一緒に箕に乗せて外にお供えしてお祭りした。

12月１日　神待祭り（かんまつり）

◆ かんまつり

出雲より八百万の神々が返ってくるのでお供え物をしてお迎えするお祭り。「11月は、神無月（かんなづき）と言い全国の神様が出雲の国に集まるため、各地に神様が居なくなるから」とのこと。

12月　終わり観音講

女性たちだけのお祭りで、1年間の無事に感謝して親睦会を行っていた。

◆ 観音講

そもそもの起こりは法華経第八巻二十五品の普門品の別称で観世音菩薩の功徳・妙力を説いたお経を観音講といい、その観音経を講じる法会とか、観世音を信仰する者の講中のことを観音講と言っている。

光武区の史跡・石造物にまつわる昔話

中将松

以前は、松の古木が光武山（高山）の中腹に生えていて、これを地元の方達は中将松と呼んでいた。今は枯死して無い。

地元の方の話で、平家の落人で平中将維盛が当地に着き何処に落ち着くかを見定める為に松の木の下に腰を下ろして休んだ所と言い伝えられている。

⑤ 牛石さん

牛石さん

平中将維盛のお供で十郎・五郎兄弟の御家来たちの荷物を運んできた牛が死に、その牛を葬り石の祠を立てたとされる。この祠を牛石と呼んでいる。

⑥ 十郎藤

十郎藤

前述の平中将維盛の家来十郎にまつわる話

牛石さんと十郎藤については、P５～６に坂本紀美子氏の投稿により詳しく掲載しておりますのでご覧ください。

おにくまさん（鬼熊さん・鬼久間さん）

平家の落人が、追手源氏の武士から主君平中将維盛を下久間村の地へ逃がすために、鬼神の如く荒れ狂って多勢の源氏の武士と切り合いの末、池の端まで来て腹を切り、はらわたをつかみ出し、池で洗い息絶えた。それを見た村人たちはびっくり仰天して「まるで鬼熊」のようだと驚き恐れた。光武の人達は亡骸を葬り祠を建て霊を慰めたと言う昔昔の話。

⑦ おにくまさん

戦いで血まみれの太刀を洗った池が、下古賀の倉庫（元授産所があったところ）の近くの太刀洗川と言われている。南下久間の維盛さんと言うお社が平中将維盛のこれまでの落人伝説の流れにつながるのではないだろうか。

光武区の過去の産業・遺跡

とんぱい（とんぱい）製作

光武公民館の東側200mほどにある丘陵地にとんぱい小屋があった。そこで陶磁器を焼く窯を作る建材のとんぱい（煉瓦の一種）を製作していた。目砂（耐火度の強い土）を掘り、つなぎとして赤土を８：２の割合に混ぜ、壁土を作る要領で練り、粘りを出す。これを型枠に入れ、押し固めて原型を作り一日ほど天日干しをする。これを羽子板のような板で６面を何度も叩いて締め、整形し、２週間ほど自然乾燥させた。主に出荷先は、波佐見・有田・黒牟田などの窯元にも馬車で出荷していた。一説によると鍋島藩の精錬所の反射炉にも使用したのではないかとのこと。

（山口昇氏談）

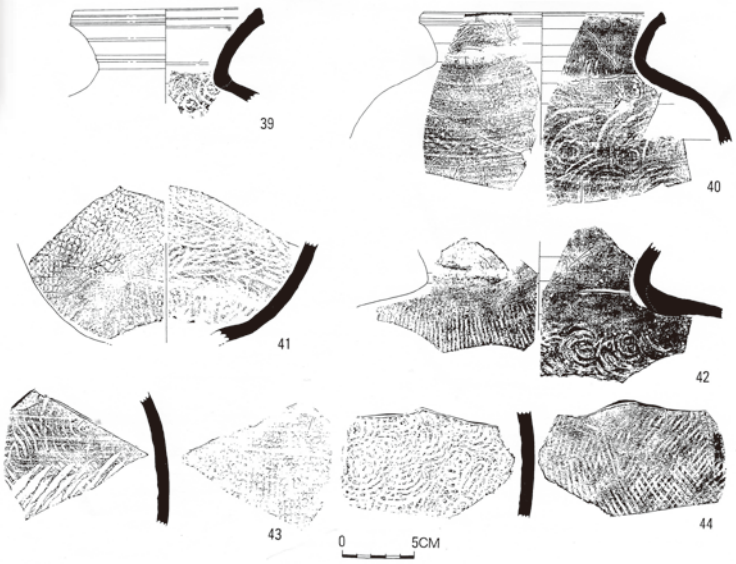
8 とんぱい小屋跡地

製作道具

9 光武窯跡地

光武窯跡

平古賀の光武つつじ園の裏手の竹林あたりに陶磁器を焼く窯があったと言われている。



光武須恵器窯跡出土遺物（塩田町教育委員会）

須恵器窯跡

久間小学校北側低丘陵斜面に古墳時代末期から奈良時代前期におよぶ須恵器の土器片が出土していることから、この辺りに須恵器を焼いた窯があったと推定される。

現在は小道や水路になり詳細な位置や規模については不明である。

万日堂阿弥陀庵（光武庵）

万日堂阿弥陀庵は、鹿島願行寺の末寺だったが後に本能寺の末寺となり、その後、一寺一派に属せず禅宗・浄土宗・浄土真宗の信徒がお参りする寺であった。

現在の庵寺は、個人の篤志により立派に建て替えられている。また境内には、不動明王や六地蔵も祀られている。

万日堂阿弥陀像

⑩ 万日堂阿弥陀庵

六地蔵

地区のお年寄りの思い出話し

◆ 光武庵での花まつり

庵寺では４月８日お釈迦様の誕生日とされる日に花まつりをされていた。地区の方達が甘茶の葉を積んで来て乾燥させ煎じて甘茶を作り、これをお釈迦様の像にかけてお釈迦様の誕生をお祝いするお祭りで、お参りした後で甘茶を頂いて帰り、御仏壇にお供えしたり家の周りにまいたりした。また、飲んでいた思い出がある。

久間村青年団幹部講習会記念
（旧　久間中学校校舎）

◆ どんぐり拾い

古い写真を見て、以前聞いた話を思い出したと言って話していただいた。その写真の裏に昭和22年久間学校尋常高等科２年とある。のちの久間中学校である。生徒たちが、どんぐりを拾い集めて学校に持って行き、集まったどんぐりを俵に詰めて車力で鹿島に出荷していたとのこと。どんぐりが何に使用されたか、鹿島の何処へ運ばれたかは分からないとのこと。

どんぐり俵

※写真提供：大川内ヒサエ氏

参考資料　塩田町史上巻･森敏治氏著の塩田昔話より

6. 堤ノ上区

堤ノ上区の来歴

元禄時代以前から小規模な堤がありました。明治18年（1885）に編纂された「佐賀県・肥前国藤津郡村誌」によると、統合され久間村となる以前の江戸期上久間村のうち、桜谷、丹生野、道徳など丹生野堤の上手にある地域を堤の上と呼んでいたことから「堤ノ上区」になったものと思われます。

（参考：塩田町史 下巻）

今も残る古賀名・地名

今の堤ノ上区は、上古賀、中古賀、下古賀、道徳、大谷、長須谷の6古賀からなる。この他の地名として、石割谷（イシワリダン）、金割（カネワリ）、前田、平原（ヒラバル）、ハジヤマ、須ガ谷（ス ダン）、長須谷（チョウスダン）、コバンタ、イゲンタン、ヤケオ、茗荷谷（メオガダン）などがある。

丹生野堤

地域の方達は、丹生野堤を「かんくまのうーづつみ」と呼んでいます。虚空蔵山系に降った雨が流れ込み、新坂川の水と合流して八幡川となり、牛坂・南下久間・町分の水田を灌漑しています。

堤防には、水神さんが祀られている石の祠に堤 源右衛門・関 孫助・栗山正左衛門の名が刻まれています。堤源右衛門は、享保13年（1728）に蓮池藩の用人（ようにん）になっています。

この大堤も時代を経て、蓮池藩が中心となって拡張工事がなされ、次第に大きくなりました。

1 大堤を護る水神さん

◆ 下久間への水路工事と水利権

水路の計画は、測量技術もなく難航し、水面の勾配を引くため、東中道の水路計画予定地に夜間、提灯を翳（かざ）し、西中道側から高低を大声で知らせ測量したといわれている。その水路から下久間に流れる水利権は、現在も下久間地区にある。

堤ノ上区のお祭りと行事

1月1日　虚空蔵山初詣り

標高288mの虚空蔵山に「初日の出」を拝むため、地域の方々をはじめ、各地から多数の参拝者が訪れる。

なお、山頂には、虚空蔵菩薩、弁財天、稲荷大明神、山名大明神、中島修平忠霊碑の神や仏が祀られている。

2 地元の人々が平安を祈って参拝される虚空蔵山

2月15日　花炒り15日

玄米を煎って花のように開かせ、仏壇に供えていた。20年ほど前まで、家まわしで実施していたが、現在は嫁たちが食事会を行っている。

4月3日　節句

子供たちの健やかな成長を祝うため、堤ノ上区では月遅れの雛祭りとしてヨモギを混ぜ込んだよもぎ餅（ふつ餅）をついて振る舞った。家庭によっては、現在も続けている。

節句のこぼれ話

「正月3日（みっか）、盆3日、節句は1日（ひして）で力んなか（力がない）」ともいわれ、節句の祝いをもっと盛大にしたいという希望があるのかも?!

5月3日　花見

まもなく始まる農繁期に備えて休養（骨休め）をとるため、3日間ほど酒盛りなどを行っていた。現在は、各古賀で、役員や壮年会が会合を行っている。

7月　さなぼり

まず、八幡宮に参り「田祈祷（たきとう）」の神事の後、公民館でお祝いをしていた。以前は区全体行事として実施していたが、現在は、区役員のみで実施している。

8月17日　観音様灯篭

区民が観音様にお参りし、スイカ割り、花火、灯篭、浮立などをして交流している。

8月22日　お地蔵さん灯籠

昭和30年初め頃まで葬式が行われていた。以前は子供相撲が行われていた。

③ お地蔵さんと土俵

9月20日　彼岸の虚空蔵山登り

午前中に虚空蔵山に登り、神事を行う。以前は鉦浮立も奉納していた。現在は、堤ノ上、中通、牛坂の3区の役員で行っている。

虚空蔵さん

菩薩さま他4体の神々

11月15日　お日待ち

早朝に餅をついて、朝日が昇る頃お供えするなどしてお日様を祀っている。その日は、お日様に休んで頂こうと、屋外にムシロ（ネブク）を干さなかった。

4 桜の大木の芯で彫刻されている観音像

12月１日　神待祭り（かんまつり）

11月（陰暦10月）出雲大社に集まっていた八百万（やおよろず）の神々が、30日の夜、地元に帰られるのを待って、その夜から1日まで神様に供えていた。現在は1日の夕刻から行われている。

12月20日　観音祭り

親・子・孫の３観音さまのお祭り。この祭りは、堤ノ上区で350年程前から行われている。親観音（大（うう）かんのんさん）は公民館に祀っている。

◆ 親子孫三代観音

この観音さんのいわれは、その昔、大堤の拡張工事が行われる際、大きな桜の木が水没することとなり、切り倒しを余儀なくされ、その身代わりにこの観音像に作り替えられたとのこと。

子観音さんと孫観音さんとしては、それぞれ「掛さん」があり、それぞれの観音さんに属する家々で、家まわしにて祭りが丁重に続けられている。

（中島哲太郎　著「鬼樔城（おんだらじょう）」より）

伝承芸能

鉦浮立と獅子舞

鉦浮立は、横笛の曲にあわせ、鉦浮立・太鼓・もーりゃしなどで合奏する。花笠をかむり浴衣着に襷がけして、前後左右に身体をふりながら、バチで鉦を叩く。総勢20名以上である。八幡宮の秋祭（11月３日の供日（くんち））には神前にて合奏奉納し、お下り・お上りには神輿行列につき、お旅所までの道行きに合奏参列する。鉦は地鉦２個・３番・４番・大鉦と五丁鉦である。8月31日の「風日」にも奉納される。

八幡宮の供日（くんち）を盛り上げる獅子

獅子舞は昭和20年代に数名の方々により発起され、現在も秋祭りのとき、雄・雌一対で神前にて奉納し、お下り・お上りの行列を先導している。両方とも中通区でも行われている。

地区の昔ばなし

『大蛇と農婦』 〈この話は、恐ろしい実話〉

終戦後、日本国中が食糧難となり、主食には麦は元より、芋（甘藷）、南瓜（ぼんかん）などが多く混入されていました。このようなことから、虚空蔵山の中腹までも開墾され、畑には夏から秋まで甘藷（いも）などの畠作が行われていました。

(昭和27年頃)

5 大蛇が生息していた谷

以下はある農婦のお話しです。

真夏の太陽が降り注ぐ７月のある日、虚空蔵山の中腹にある我が家の畠まで芋の蔓を背負い作業をしていましたが、作業をしているうちに炎天下には耐えられず、持ってきた水筒も飲んでしまい、水を欲しくても下久間まで帰ることもできず、水を求めて虚空蔵山と蛇山との斜面を下ると、杉や雑木が茂りひんやりした小さな谷にせせらぎの音を聞き、一気に顔を水面に突っ込みガブガブと飲み、生き返った我に安堵しました。その時の水の美味しさは忘れることはできません。

水を腹いっぱい飲み一息ついて足元を見ると、**右足で踏んでいる枯木がふんわりとした**ようで、その枯木を辿り上を見ると、なんと**ビックリ仰天!!**それは、それは、**恐ろしい大蛇が私の方に太い首を向けている**ではありませんか。その瞬間、私は生きた気持ちがせず、ただ、恐ろしいばかり。下ってきた斜面を這い上がろうと懸命に登るが、腰が抜けて何度も何度も滑りながら九死に一生！命からがら自分の畠に辿りつき、持ってきた鍬など捨て、身体ひとつで一目散に我が家を目指し、どのようにして帰って来たのか記憶にありませんでした。

我が家に着くと、主人が私の異常な顔色や行動に**「なんじゃあったとか」**と聞きましたが、一週間ほど語ることも出来ず、昼間でも黄色な世界が私の頭をよぎり、暫く経ってから我に返り主人に話しました。

その後、筆者は改めて農婦のご自宅を尋ねて事実を確認しました。この方の他にも大蛇に遭遇した方々が数人おられたとのことでした。

(堤ノ上区　平野昭義　著)

地域の話題

◆ 中島家と官修墳墓

6 中島氏一族が眠る官修墳墓

天保４年生まれの中島修平氏は、昌平校（江戸幕府直轄の昌平坂学問所）に学び、文久元年、塩田代官に任ぜられ、藤津軍令も兼務していた。

明治７年２月に佐賀の乱がおこり、時に県権中属の職にあって佐賀城に立てこもるも衆寡敵せず、公金を死守して殉職なさった（御年41歳）。そこで、その遺体は一族と地域の人々により久間に持ち帰り葬られた。政府はその忠烈に報いるため靖国神社に合祀し、「官修墳墓」として年々祭祀料を賜っていた。

（中島哲太郎　著「鬼楢城（おんだらじょう）」より）

丹生野堤（大堤）

7. 中通区

中通区の来歴

明治18年（1885）に編纂された「佐賀県・肥前国藤津郡村誌」によると、統合され久間村となる以前の江戸期上久間村のうち、現在の中通地区には、八幡篭、山ノ神、城山、藤原などと呼ばれていた地域がありました。八幡川沿いに細くて湾曲した小道がありました。

その後、初代久間村長 中島民三氏は、現塩田町下町から上久間に通じる村道を幅広くし、特にこの地域は真ん中を真直ぐに通すべく尽力された。そこからこの地区は「中通」と呼ばれるようになったものと思われます。　（塩田町史 下巻、中島哲太郎　著「鬼樒城（オンダラジョウ）」より）

今も残る古賀名・地名

今の中通区は、河内（コーチ）、琵琶石（ビヤシ）、山ノ神（ヤマンカミ）、新坂（シンザコ）、上小路（カミクウジ）、下小路（シモクウジ）、中ノ館（ナカンタチ）、藤原、城ノ上（ジョウノヲ）の９古賀からなる。

この他の地名として、ジャアケボイ、湯ノ谷（ユノタン）、三軒屋、鳥越、アカハゲ、野崎（ノウザキ）、塔中（タツチュウ）（館中）、溝原（ミゾワラ）、ヨネダ、構（カマエ）、馬ヶ谷（ウンボガダン）、冬野角（フイノガク）、永尾、オタチメ、梅木谷（ウメノキダン）、桂尾（カズラオ）、唐渡（トウド）越（ゴエ）、廣鹿倉（ヒロガクラ）、杉谷（スギンタン）、五右衛門谷（ゴエモンダン）、石割谷（イシワリダン）などがある。

中通区のお祭り

4月13日　鳴神祭り（ならかみまつり）

新坂（シンザコ）地区のお祭り。雷が落ちないように祈願して、祭りを行っている。

6月20日前後の日曜日　田植え祭り

地域の子供たちに昔ながらの田植え体験をさせるため、2年前から実施している。植えた餅苗は、秋の稲刈り体験を経て収穫し、12月の餅つき大会に使用している。

1 田植え祭りの様子

6月最終日曜日　さなぼり

全区民を対象に、まず、八幡宮に参り田祈祷（たきとう）を行い、その後、公民館で懇親会を行っている。

7月中旬　ほたるの里祭り

20本以上の竹灯篭を作って、消防分団近くの八幡川土手に並べ、思い思いに区民がほたるの乱舞を鑑賞している。現在では、地区外からも多くの方々が鑑賞に来られています。

2 手作りの竹灯篭の灯

8月18日前後の土曜　丹生寺（たんじょうじ）夏祭り

読経にあわせて区民も参拝し、子供たちのスイカ割り、カラオケ大会、婦人部によるビール早飲み大会、ビンゴゲームなどの余興を行い楽しんでいる。

婦人部の早飲み競争

◆ 丹生寺（中島哲太郎氏著　鬼棯城より）

ご本尊は阿弥陀如来。江戸初期に作られた高級仏像で白毫（ビャクゴウ）は水晶。また、楠を材とする一木作り観音立像もある。更に江戸中期の作とされる石造り観音座像もある。

ここには、かつての久間城主 鍋島助左右衛門茂治の三男貞恒のお墓があり、この辺りは茂治の館があった所と思われる。なお、後述の原田願海さんのお墓もある。

3 丹生寺（昭和50年頃）

阿弥陀如来像と観音座像

８月31日　かざび（風日、風神日）

鉦浮立を仕立てて八幡宮に奉納した後、以前は、翌日、吉浦神社にも奉納し、塩田の町並みを打って廻り、地域の役員宅などでも打っていた。今日では、当日、公民館で懇親会を行っている。

10月下旬　子ども稲刈り体験

６月の田植え祭りで植えた稲（餅）を、子供たちが昔ながらに鎌で刈り取り、乾燥させるために田圃で天日干しを行っている。収穫餅米は、12月の餅つき大会に使っている。

稲刈り体験の様子

11月第２日曜日　お日待ち

以前は、五穀豊穣を祈念し、餅をついてお日様に感謝の意を込めてお供えをしていた。今日では、午前中に各古賀対抗のグラウンドゴルフ大会を開き、その後、各古賀別に懇親会を開き、区民相互の親睦を図っている。

12月１日　神待祭り（かんまつり）

各古賀別に、営所宅にお供えしてある御礼に参りし、御神酒と「ごっくうさん（ご飯を十数cmに積み上げたもの）３塔」をいただく。その後、官総代から預かっていた各御礼（天照大神、八天神社、八幡宮）を授かり、懇親会を行っている。

以前は、営所（当番）宅に旗を立て、寄通（よいつ）（営所の加勢をする宅）と共に開催していた。

神待祭りの「ごっくうさん」

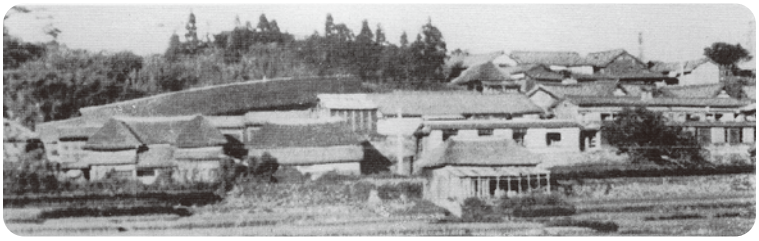
12月第１日曜日　子ども餅つき大会

子どもたちに餅をつかせ、全区民を挙げて60kgもの餅をつきあげ、全戸に配付している。また、お雑煮、ぜんざい、きな粉餅を作って懇親会を開いている。

4 餅つき体験の様子

過去の産業《上久間窯》

熊山（現在の上久間）における窯業



5 貞包㊞製陶所　工場全景（昭和7年撮影）

堤ノ上の中島信成氏の支援もあって、明治初期より窯業が営まれていた。中通地区には、4つの窯があった。八幡川には、天草石を杵づきして陶土にするため、転々と十数基の水車が回っていた。窯元もこの丘陵地に軒を連ね、登り窯の煙突からはもくもくと煙が立ち上っていた。その燃料は、松の薪であった。

塩田に通じる道路は往還といわれ、馬車・牛車が盛んに上り下りしていて、上りには陶石や薪を、下りには焼き物の製品が積まれていた。それらは塩田津の港から大阪方面、朝鮮方面などに輸出されていた。

製品は、大きな酒樽、火鉢、大皿のほか、小皿、茶碗、湯たんぽ、溲瓶（しびん）などの日用陶磁器も製造されていた。

しかし、太平洋戦争激化と共に昭和17年企業整備令によりこれらの窯元は西山の志田会社に合併されていった。

（中島哲太郎　著　「鬼棯城」より）

貞包 与平　作　（中島 哲太郎氏　所蔵）

伝承芸能

獅子舞について

6 八幡宮での獅子舞奉納

明治30年頃、鹿島市の横田地区のものを伝承したといわれている（貞包寅次氏の談）。

青面青服の雄と赤面赤服の雌雄一対で、それぞれ股引（モモヒ）き姿の二人のうち前の者が獅子頭の面を操り、胴体は唐獅子模様の布で覆い、後の者が長大の尻尾を振って舞う。

八幡宮の秋の大祭（11月3日の供日）時に神前にて舞を奉納し、また、お下りお上りの行列を先導する。なお、先年の焱博のときに有田及び吉野ヶ里会場で舞を舞った。

（中島哲太郎　著　「鬼棯城」より）

鉦浮立について

八幡宮の秋の大祭時には神前にて合奏奉納し、お下りお上りには神輿行列についてお旅所までの道行きに合奏参列する。風日（8月31日）にも合奏する。以前は、9月20日お彼岸の虚空蔵山登りにも同行していた。

なお、獅子舞と同様に先年の焱博のときに有田及び吉野ヶ里会場で舞を舞った。

（中島哲太郎　著　「鬼棯城」より）

地区に残る昔ばなし・史跡・石造物等

鬼樒城と構の砦

7 中ノ館より鬼樒城を臨む。左下方が構の砦

16世紀頃、大村・有馬方により、標高230mほどの当地に山城の鬼樒城が築かれた。山頂本丸の部分は広い平地で、往時は五輪の塔が十数甚あった模様。

鬼樒城に登頂する尾根筋の先端に位置する城塞の「構（カマエ）」は、鬼樒城の出城・出丸の砦と思われる。

当時は戦国時代で、大村と有馬、大村と武雄の後藤、龍造寺と有馬など争いが繰り返されていた。永禄7年（1564）、五町田吉浦の籾岳（モミダケ）城（城主は原直影）を大村・有馬方が攻めたて、大きな攻防戦が行なわれたが、この鬼樒城及び連郭の塩吹城でも攻防がなされたと思われる。（中島哲太郎　著　「鬼樒城」より）

◆ **新坂（シンザコ）**　この山城に牛馬を使って物資を運んでいたので、その南東部を「牛坂」、その道が険しかったので新しい坂道に作りかえた所を「新坂」と言うようになったとの言い伝えがある。

二人の寄塔（ヨセトウ）

8 鍋島茂治と綾部充の墓碑

今から400年ほど前の慶長18年（1613）、名君の誉れ高い久間城主鍋島助右衛門茂治公と嫡男織部充（オリベマコト）が、本藩の御法度を破ったかどで時の藩主鍋島勝茂（茂治の従兄弟）により切腹を命ぜられた。18名もの若い家来も追腹をした（殉死）。主従合計20名がその日に果てた。

秀吉の朝鮮出兵時、蔚山籠城（ウルサンロウジョウ）の絶体絶命の危機に瀕した加藤清正を鍋島勢ら援軍が救出した。その武勲を立てた茂治公は清正公からの申し出で、その家臣に長女妙を嫁がせる約束をする。ところが、鍋島の政権が直茂から勝茂に移ると、他国との縁組を禁じる法度が出された。

清正公との約束を守れば藩の掟を破ることになる。そこで、茂治公は密かに長女を肥後に送り出す。しかし、そのことは佐賀本藩の知るところとなり、藩の重臣成富兵庫茂安に連れ戻された長女は、佐賀城下今宿の威徳院に預けられ、その寺で自害したという。

慶長18年10月13日、茂治公の館沿いの小路川（クウジガワ）が真っ赤になった。茂治公と織部、そして、主君の死に殉じた18人の家臣の流した血がそばを流れる清流を赤く染めたのである。

本藩から使わされた検役の者達は、事の次第を直に検分し、その壮絶さに言葉もなかったという。

正にこの地の人達にとっても、動転・驚愕の大事件であった。それまで鹿島・塩田まで進出していた大村・有馬の軍勢を放逐した後、20数年にわたって徳政をしていた茂治公親子に加え、若者18名もの殉死があった。ご法度・ご禁制に背いたとはいえ、悲惨・冷酷しかも壮烈な最後を悼み、密かにこの「二人の寄塔」を墓碑として祀ったといわれている。また、血染めの小路川を当時は「血川（チノカワ）」と呼んでいたと「葉隠」には記されている。

その後、罪を解かれて33回忌の供養塔、いわゆる「塔中（タッチュウ）さん」が正保２年（1645）、北下久問の治福庵の前に建てられた。　（中島哲太郎　著　「鬼楢城」より）

参照：坂本紀美子　著「小路川」、森敏治　著「塩田昔話」

お姫さんの墓

蓮池藩第18代藩主直与公の娘・菊子（鍋島紀康氏の妻）の墓がある（二人の寄塔のとなり）。菊子さんは若くして病で亡くなった。地元の人たちは、その死を惜しみ「お姫さんの墓」として祀っている。直与公は幕末に大いに活躍され、紀康氏はその家老で、鍋島貞恒公（茂治公の三男で蓮池藩の家老）からすれば第九代目にあたる。　（中島哲太郎　著　「鬼楢城」より）

9 菊子様の墓

願海さん

本名を原田願左衛門重氏といい、丹生野（ニブノ）の大堤をより大きく築き、その水を下久間に導き、畑田・古子の丘陵地を水田に作りかえることに成功した。この導水路を作るにあたっては、夜提灯を方々に吊し、土地の高低を測量するいわゆる提灯測量を用いたと伝えられている。

また、久間小学校下の志田原堤の構築も行い、地域の水の確保や灌漑に大きく貢献した。

（中島哲太郎　著　「鬼楢城」より）

中通青年団基金記念碑

明治43年（1910）設立。金融機関がない当時に、農業改良等に資するため、中通青年団員により基金が創設された。拠出は現金だけでなく、現物の玄米でも行われた。基金はこの地域の発展の礎となった。　（中島哲太郎　著　「鬼楢城」より）

10 中通青年団基金記念碑

8. 牛坂区

牛坂区の来歴

明治18年（1885）に編纂された「佐賀県・肥前国藤津郡村誌」によると、統合され久間村となる以前の江戸期上久間村のうち、現在の牛坂地区には、鍛冶屋町（カッチャマチ）、梅谷（ウメダン）、谷頭（タンガシラ）などの地域があり、この地域を牛坂と呼ぶようになりました。牛坂の名の由来は、城（鬼樒城（おんだらじょう））に上るとき、坂道を食料や物品を牛の背に乗せて運び上げたところから牛坂と呼ぶようになったと思われます。

今も残る古賀名・地名

今の牛坂区は、浦、中、谷頭（タンガシラ）、東上（ウエ）、東下（シタ）の5古賀からなる。この他の地名として、権現山、鍛冶屋（カッチャ）町（マチ）、一ノ谷（イチノタン）、梅谷（ウメダン）、馬乗谷（ウマガダン）、洗出し（アリャーダシ）、庚申川（コウシンガワ）（地蔵さん川とも言う）、椎林（シービャージイ）、オナガヤ、鬼樒城（オンダラジョウ）、狸谷（タヌキダン）、松尾などがある。

牛坂区のお祭り

7月9日　水神さん祭り

水難事故が起こらないように水神さんに祈願し、余興として、梅谷にある溜池の堤防で小学1年生から中学3年生の男子全員で相撲大会を行っている。現在は女子も加わっている。

1 水神社　　水神さん祭りの子ども相撲

7月21日　お大師(弘法大師)祭り

女性部が担当し、はじめに読経を行ってから懇親会を開いている。各古賀まわしで実施している。お遍路さんの接待も兼ねている。

2 お大師堂

8月23日　地蔵祭り

立教山常応寺の境内に阿弥陀如来の地蔵尊がある。牛坂青年団会誌の記録(大正13年)によると「地蔵祭を開催、余興として吉田村より琵琶法師、福山清流氏に来会を願う。盛大なる祭りにて近年稀に見る人出で12時に終り、一同帰散す。それより団員一同会場にて夜通し浮立をなす」と記されている。

(中島哲太郎氏著「鬼棯城」より)

今は、PTA主催の子供たちのスイカ割り、大人は、区役員や班長さん方を中心に鉦浮立を舞っている。

3 地蔵尊

8月31日　かざび(風日、風神日)

他地区と同様に実施しているが、牛坂区では鉦浮立を仕立てて八幡宮に奉納した後、公民館で懇親会を行っている。

なお、牛坂の浮立の鉦の数は、他地区より1個多く、6丁鉦で奏でている。

6丁鉦

9月20日　彼岸の虚空蔵山登り

午前中に虚空蔵山に登り、神事を行う。以前は鉦浮立も奉納していた模様。現在は、堤ノ上、中通、牛坂の3区の役員で行っている。

11月3日　八幡宮秋季大祭

毎年、氏子たちによって盛大に開催されている。以前は、久間地区のまわし持ちで実施されていたが、現在は、６区のまわし持ちで、大祭を実施している。

牛坂地区が担当する年は、面浮立が神前にて演舞され、お下り、お上りの神輿行列に付いてお旅所まで道行きをする。

※八幡宮のお祭りについてはP2もご一読下さい。

11月15日　お日待ち

他地区同様に餅をついてお日様にお供えしている。

お供え餅は、事後、糸で切って小分けにし、各戸に配付して祭りを共有している。なお、お餅は、火事にならないよう、焼かずに食べていたとのこと。

12月1日　神待祭り（かんまつり）

中通と同様に、各古賀別に実施し、古賀によっては御神酒とごっくうさん（ご飯を十数cmに積み上げたもの３塔）をいただくところもある。その後、懇親会を行っている。

掛軸

12月9日　山神祭り（やまんかみまつり）

公民館において、山の恵み（木材、炭、水など）に感謝し、これからの生活の安定と安全を祈願している。

まず、長老が神主様を招聘（しょうへい）し、お祓い神事を行う。次に営所（長老）、２番長老、３番長老によりお謡いを３番謡いあげる。そして、既婚の家長男性だけで盛大に懇親会を行っている。

その後、営所（長老）は引退して、２番長老にゆずる。

◆ 三夜待の由来

月夜待信仰（さんやまちしんこう）の一つ（月待講）で、十三、十五、十七、十九、二十三、二十六などの月齢の夜に人々が集い、月の出を待って供物を供え、観音経を唱え、安心立命、無事息災を祈り、勤行や飲食物を共にする古い風習です。

日本では神話の時代より月光には神霊が宿っていて、満月を豊穣のシンボルとして拝していました。特に二十三夜様は、「三夜待」、「産夜」とも呼ばれて女性の講だとされております。

牛坂地区では、男性が二十三夜様（三夜待）、女性が二十六夜様（六夜待）とされており、二十三夜塔や祠を建て祀られているところもあります。

記録が残っている明治15年以降では、10人ぐらいの人数で、三夜待を月番宅で毎月23日の夜に集まり、二十三夜様の掛軸を祀り信仰し、合わせて御講（頼母子講）が実施されていたとあります。

なぜ二十三夜なのかと言うと、旧暦の二十三夜は満月ではなく、下弦の月となり、真夜中の東の空に昇ります。昔の人は、その月に何かしらの神秘性を感じたものと思われます。

（常応寺住職　福田弘明氏より）

伝承芸能

牛坂区　面浮立

面浮立について

牛坂地区には、百数十年前に五町田真崎から伝承されたという面浮立の舞が続けられている。神前にて演舞し、八幡宮秋の大祭では、神輿行列に付いて道行きする。

鬼の面をつけ、木綿の襦袢に股引きをはき「もーりゃし」という小鼓を腹部につるし、両手の小撥にて打つ。囃子に合わせて上下運動を主に横笛の曲に合わせて勇壮に踊る。また、花笠をつけた女性が鉦を叩く。赤面・青面のささら（竹竿）を先導に踊手30名（うち子供10名）、太鼓３名、笛４名、鉦の女性23名、総勢60名ほどである。

踊りは13曲目ほどあるが、通常は７曲位で、ほうがんどう・しんばやし・道行き・むらわたし・神の舞などである。なお、先年の炎博のときに有田及び吉野ヶ里会場に出演した。

（中島哲太郎　著　「鬼棯城」より）

過去の産業・史跡・石造物等

採石場と塩田石工

牛坂の集落西の山手に大きな幾つもの採石場（丁場）があった。谷頭から奥に入った梅谷に7ヶ所余り、狸谷に２ヶ所ほどあり、谷間の左右は10m～20mほどの見上げるような高い断崖となっていた。ここから切り出された石材は、馬車・牛車にて車輪を軋ませて谷間の道を運び出された。

採石場では、昼間に岩に穴を開け、夕方、火薬発破を仕掛けていたので、それらの轟音が付近の山々にとどろき渡り、丁場の一日が終わっていたとのこと。

切り出された大部分の石材は、建築石として出荷され、一部は、高い技術を持った石工により、石仏や石橋、鳥居や石灯籠にも加工された。八幡宮に奉納されているゆったりとした見事な「神牛」は、地元牛坂の石工、糸山輿八さんの作品とされている。

4 神牛

5 採石場跡

水車

八幡川の牛坂地区にも５基の水車が設置されていた。運ばれてきた天草石を杵づきして陶土化し、当時、栄えていた上久間地区の窯業を支えていたものと思われる。

八幡宮と明学坊

建久元年（1190）8月15日に鎌倉鶴岡八幡宮の分霊を頂き、鎮守の神として祀り、応神天皇と平維盛を合祀してある八幡宮境内には、鳥居（蓮の池藩祖鍋島直澄公寄進。素朴な安定感をもつ肥前鳥居の一つ）、眼鏡橋、ホラ貝の形をなしている手水鉢など立派な石造物があり、当時の石工の技術水準が高かったことを伺わせる。

明学坊は八幡宮東側（30m）の位置（現在の「信風窯」付近）にあった。そこは宮司か坊主が寝泊まりしていた家（「坊」と言う）で、生活住居であった。また、坊は御寺の機能をも果たしていた。

この明学坊の林勝は、八幡宮宮司と坊を兼務し、文化十年（1813）琳仙まで代々努めていたと思われる。その後、光山家が昭和初期まで宮司と坊を兼務している。

（中島哲太郎　著　「鬼樒城」より）

仁王像

江戸時代神仏同居の時代は、神道より仏教が上の地位にある時代から明治に移り、神仏分離政策により神社と坊【寺】が切り離されてしまいました。このことにより神社境内に建立されていた仁王像が近くの坊【寺】に移されたとのことです。

塩田町内神社の仁王像も近くの坊【寺】に移されています。ちなみに八幡宮境内にあった仁王像も中町にある本鷹寺の山門に移されています。

6 肥前鳥居

眼鏡橋

ホラ貝の手水鉢

7 明学坊跡地

地区に残る昔ばなし

牛坂青年団（牛坂青年団会誌による）

青年団会誌

記録によると、他地区同様に、大正・昭和・戦中戦後、牛坂地区でも青年団活動が盛んに行われていた模様。毎月の夜の例会には、講話・補習教室があり、謡曲・浮立・撃剣の稽古、それにお互いに理髪をしていた。5月には花見を行い、一年のうちで最大の交歓「春慰」の行事であった。例年、この花見は、或る団員宅に「宿」をきめ、6日間、朝・昼・晩と歓をつくしていた。その経費は、月々貯金を積み立てていた。また、出稼ぎに出ている者もこの時ばかりは、待望の宴に帰省し参加していたとのこと。小旅行もしていた模様。

（中島哲太郎　著　「鬼棯城」より）

むくろ打ち(地域の遊び)

その昔、子供たちは身近な物を遊びに使っていた。ビー玉が出回る前は、黒いむくろ（椋の木の種）を使って玉遊びをしていた。他に楠実鉄砲や紙鉄砲を作り、石蹴り、わんぐい回し、竹馬、おじゃこ（お手玉）などで、時間を忘れて遊んでいた。

さなぼり饅頭（地域の話題）

数十年前まで、水害や水難事故が起こらないよう、洗い川の川岸に宿す「水の神様」（12ヶ所）に饅頭をお供えしていた。しばらくすると、子供たちは、その饅頭をとって食べていたとのこと。子供たちの笑顔が思い浮かびそう。

久間ぐんちの思い出

私の子供の頃は、久間ぐんちの日には、、久間小中学校は休みとなり、当番地区の子供たちはきれいに着飾って、お下りお上りの行列に参加したものでした。

当時のおくんちは、八幡さん（八幡宮）からお下り神輿（しんこう）があり、志田の権現さん（志田神社）へ下って行きました。御神輿（おみこし）は、御神輿（おみこし）を担ぎ、鉦浮立、面浮立、獅子舞を舞いながら、また、子供たちも一緒に行列に参加していました。権現さんに一泊し、翌日のお上り神輿（しんこう）で八幡さんへ帰っていました。

沿道の人々は、御神輿（おみこし）をくぐり、獅子頭のヒゲをちぎり取り、そのヒゲを神棚にお供えして一年の無事を祈ったものです。また、ヒゲを取るとき、獅子を舞う人に足で蹴られながら取ったものです。夜には、歌舞伎や旅芸人のお芝居などが夜遅くまで行われ賑わっていました。子供の頃の良き思い出です。

中久間区　田中三代司　著

9. 南下久間区

南下久間区の来歴

明治18年（1885年）に編纂（へんさん）された「佐賀県肥前国藤津郡村誌」によると、統合され久間村となる以前の江戸期下久間村には、新御堂、久保、宿、南などの地域があって、この地域を南下久間と呼ぶようになりました。

今も残る地区名と古賀名

今の南下久間区にある地区は、**新御堂（シミドウ）地区**（裏（ウラ）古賀、前（マエ）古賀、下（シモ）古賀、向（ムカエ）古賀からなり他に、つっとい、どてうら、はたけだなどの呼び名がある）、**久保・宿 地区**（久保と宿の地域が一緒になってできた地区で、宿古賀、前古賀、裏古賀、北古賀からなる。）辻山の南側に位置する**南地区**（上古賀、中古賀、下古賀からなり、他にむぞの、なしもとなどの呼び名がある。）の３地区がある。

なお、新御堂の地名は、「志美道」→「新水道」（開墾された時に新しい水路を造った時の呼び名）→「新御堂（シンミドウ）」（永正寺が建立された時の呼び名）→「新御堂（シミドウ）」（明治１１年に永正寺が火災により再建された時に呼び名を変更）のような変遷を経ている。

南下久間区のお祭りと行事

1月25日　御神さん祭り

久保・宿 地区の前古賀と裏古賀の方々が、夕方から下田の御神塔に御神酒を供えて神事を行い、終了後、家頭（当番）の家で寄頭（賄い人）の手伝いを受けて料理を作り、振る舞っていた。現在は折り詰めと酒で親睦を深める場になっている。

なお、この久保・宿 地区の下田にある「御神さん」の御神体は有明海の沖ノ島から持ち帰ったもので、いわゆる「お島さん」として祀っている。干ばつの被害に遇わないように願い稲の豊作を祈っていたものと思われる。

1 下田の「御神さん」

2月15日　花炒り十五日

餅米を鍋で炒って花のような形に開かせ、これらを木の枝に付けて花の代わりとし、これを自宅に持ち帰って床の間に飾った。婦人会行事として家まわしで開催し、地域の親交を深めていた。

4月3日　桃の節句

昭和の時代まで、各家々で餅を搗いてふつ餅（よもぎ餅）とし、節句を祝っていた。

お餅のスタミナがお腹に残っている間に（4月3日前後に）、トウモロコシなどの春から夏に収穫する野菜の種蒔きをした方がよいとの言い伝えが残っている。

ふつ餅

6月下旬か7月上旬　さなぼり

集団で田植えを行っていた昭和の時代までは、八幡宮田祈祷の翌日に八幡宮を参拝し、各家々では「さなぼり饅頭」を作っていた。田植えに加勢してくれた方々に賃金を支払う際に、この饅頭もお礼として差し上げていた。

さなぼり饅頭

現在は、南・北下久間両区の役員が八幡宮に参拝したあと、大区長（両区のとりまとめ）の自宅で、田植え作業を労い、その後の稲の生育、豊作を願って懇親会を開いている。

8月最終日曜日　南下久間区の夏祭り

昭和50年頃から、農村公園にて区内の親睦を深めるため、運動会を行うようになった。その後、グラウンドゴルフの普及により、3世代交流を掲げて3地区（新御堂地区、久保・宿 地区、南地区）対抗のグラウンドゴルフ大会を開いている。終了後は、区民あげて飲食を共にし、舞台を造ってカラオケを楽しむなど交流を深めている。

カラオケ装置

2 グラウンドゴルフ大会

8月31日　かざび（風日・風神日）

午後から八幡宮に鉦浮立を奉納後、新御堂にある「西の前」御神さん、久保・宿の下田にある御神さん、最後は、公民館で浮立を奉納する。その後、公民館にて懇親会を開いていている。

3 西の前の「御神さん」

4 公民館前

9月15日　八幡宮夏祭り

6区（堤ノ上、中通、牛坂、南下久間、北下久間、光武）のまわし持ちで実施している。

9月第3月曜日（敬老の日）　南下久間区敬老祝賀会

南下久間区では、毎年、75歳以上の方を敬老祝賀会に招待し、公民館で小宴を催している。
昨年は対象者44名中26名に出席していただき、カラオケをはじめ、区の役員や女性部役員の十八番のお家芸などの余興で楽しいひとときを過ごしていただいた。

皿おどり

猿おどり

11月3日　八幡宮秋季大祭（6区で、6年に1回担当する）

「八幡宮夏祭り」と同様に6区のまわし持ちで、氏子たちによって開催されている。南下久間区は近年では平成27年度に担当し、他地区同様に神事、鉦浮立奉納、神輿行列等盛大に執り行った。

11月15日　お日待ち

他地区同様に餅をついてお日様に供えている。

12月1日　神待祭り（かんまつり）

他地区同様に、南下久間でも三地区別に神事を行っている。

5 永正寺

地域の歴史

永正寺と新御堂地区の由来

昔、久間氏累代の居館があったところに、阿弥陀如来を本尊とする正眞山 永正寺がある。開基（寺院を創立すること、創立した人。）までの由来をみると、永正年間（1504～1521年）の頃、西松浦郡荘新村古木場に天台宗永正院という寺があったが、門徒が久間地区に移住したのに伴い、寛文元年（1661年）、正眞師は、宗派改宗して浄土真宗に帰依し、当地に正眞山と号して新しく永正寺を建立した。

その後、明治11年（1878年）、本堂が火災により全焼したため、翌年、新たに御堂が建立された。これに因んでこの地域を「新御堂」と呼ぶようになった。

なお、建立に当たっては、棟梁が宮地時太郎、他17名の大工が尽力した。

参照：「塩田町史」、「久間村郷土志」

円福寺の由来と六地蔵

境内に樹齢450年の大楠が茂る熊谷山（ゆうこくざん） 円福寺（浄土真宗本願寺派）は、中国地方の武将であった竜玄（筑前博多万行寺に逗留（とうりゅう）して後に出家し、号を竜玄と名のった）が、50歳にて当地に来て、薬師如来像並六地蔵を発見し、有縁の地として寺院を創立したものである。本尊を阿弥陀如来とする。

なお、本堂は八代住職 江實の代に火災に遭い、天保9年（1838年）に再建立されたと伝えられている。また、薬師如来像並六地蔵は本堂前に安置されている。

森敏治　著「塩田昔話」、「塩田町史」より

6 円福寺

六地蔵

薬師如来像

下久間宿地区の歴史

長崎街道筋にあった下久間宿は、降雨で出水して通行不能になりやすい塩田宿の予備・代替として栄え、塩肴その他の商売も盛んであった。詳細は不明であるが、宿地区の街道筋数軒に宿の面影を観ることができる。

7 下久間宿の面影

長崎街道（シュガーロード）

江戸時代は貴重品であった砂糖は、唯一の貿易港の長崎港で荷揚げされ、全国に運ばれた。街道沿いには砂糖菓子が伝えられ、下久間宿においても菓子が作られていた。今でも結婚式等お目出度い席には、金花糖のひとつとして色鮮やかな番（つが）いの鯛や共白髪の翁たちをあしらった「スガジャー」（寿賀台）なども飾られている。

写真提供：馬場菓子店

スガジャー

柳茶屋

国道498号線沿いにある荒木商店（現下久間バス停）を地元の人は、柳茶屋と呼んでいる。呼び名の由来は、以前、お店の前に高さ2.5m（直径30cm）ほどの柳の大木があったからである。樹齢は不明であるが、明治38年に開通した祐徳神社－武雄間の祐徳馬車鉄道・軌道（その後はバス）の利用者を見守ってきたと思われるが、昭和36年頃の道路拡幅工事のため、伐採されたとのこと。惜しまれている。

8 柳茶屋

馬車鉄道

イラスト：荒木幸宏氏

南下久間の史跡

鬼塚古墳（新御堂の長の眠る鬼塚）

古墳時代、新御堂を治めていた長は、優れた才能を持ち、天気の見方も優れ、水を引く土木工事や稲の作り方にも優れていた。それで、下久間村の村人たちは、彼の指示に従い米作りに励んでいた。

しかし、彼も病に倒れ、村人たちの手厚い看護もむなしく亡くなった。村人たちは、彼の死を悲しんで村の奥に塚を築き、彼の用いた馬具や刀、身に付けていた装飾品などを亡骸とともに葬った。この塚を鬼塚（鬼とは、死者の魂、また人間が死んで神となったとの意味がある。）と呼んでお参りしていたと言い伝えられている。

⑨ 鬼塚古墳

発掘調査（昭和29年）によると、この古墳は、径20m、高さ3m余りの円墳であったと推定されている。その内部は南北に主軸をとり、南に開口した横穴式石室である。出土遺物は祐徳博物館に収蔵されている。

参照：森敏治　著「塩田昔話」、塩田町史上巻

維盛さんと立烏帽子

壇ノ浦の合戦後、三位中将平維盛は落人となり、南下久間の辻山で小庵をつくり忍んで暮らしていたとのこと。ひらくち（まむし）を退治し村人を守ったなどの伝説がある。

立烏帽子

⑩ 維盛さん

また、中将の烏帽子を着せていたとされる屋敷（江口家の屋敷で「立烏帽子（たてえぼし）」という）もある。

※ 詳しくは、P7に記載の「維盛の隠棲の伝説に由来する維盛社」（荒木司氏 著）をご一読下さい。

火矢床（砲座）

幕末安政の頃（1855年～）、維盛社のうしろの字（あざ）辻の高台に旧蓮池藩主が大砲を据え付けて、的を鷹取山中腹として藩士にその射撃の練習をさせていた所がある。土地の人はこれをと火矢床（ひやどこ）と言っている。当時は大砲を石火矢と言っていたので、火矢床とは大砲射場のことである。浦賀にペリーが来航した頃（1853年）、当時の蓮池藩主鍋島直與公は、時勢が変遷することを見据えて武備を拡張するため巨砲を鋳造し、放射練習のため、当地にこの大砲射場を築造させたとのことである。

参考資料：久間村郷土志

⑪ 火矢床

地域の言い伝え

天気のことわざ

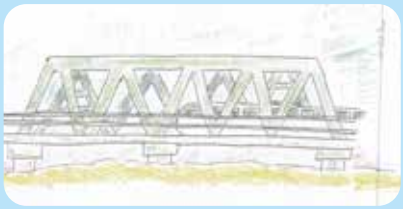
「唐泉山に雲がかかれば、雨が降る」といわれ、南下久間から南西の方角に位置する唐泉山に雲がかかれば、上久間の方から雨が降り出すとの予測。

唐泉山

「百貫橋の汽車の音が聞こえるときは、雨が降る」

東の方角に位置する百貫橋を汽車が通るとき、その音がよく聞こえるのは、雨の兆候とされている。

雲の動きや音の伝わり方が変化する気象現象を、長年の経験から察知し、農作業の段取りなどの目安としていたらしい。



百貫橋（鉄橋）

イラスト：荒木幸宏氏

過去の産業 ≪跡地≫

造り酒屋

宿地区には、造り酒屋があった。造り手は藤永嘉市氏で、「典乃藤」「藤美人」等の銘柄で昭和20年代まで製造し販売していた。社長の弟は、近くで精米所を営み、また、そうめんの製造も行っていた。

⑫ 元 藤永酒店

田﨑商店（現在の田﨑製茶本舗）

４代前の社長 田﨑茂一氏（久間村長：昭和２年11月～昭和8年６月）は、ハゼの実から油と蝋を精製して販売し財をなした。その子の喜一氏は、その財をもとに長崎県上五島で漁業を営み、捕れた魚を肥料に加工して販売していた。戦後は、化学肥料の普及により売り上げが減少したのでこれを廃業し、昭和28年頃から所有農地で茶を栽培して茶葉に製造・加工し販売をはじめ、今日に至っている。　（現在の建物は明治10年建立）

⑬ 田﨑商店

10. 北下久間区

北下久間区の来歴

明治18年（1885年）に編纂された「佐賀県肥前国藤津郡村誌」によると、統合され久間村となる以前の江戸期下久間村のうち、北の方角に位置する、本志田原（ホンシダバル）、中渡（ナカワタシ）、大草場（オオクサバ）、のぞえ、また、古子（フルコ）、大六（オオロク）、丹坂（アカサカ）、高畑（タカバタケ）、北谷（キタダン）などの地域があって、この地域を北下久間と呼ぶようになった。

今も残る地名と古賀名

今の北下久間区にある地区は、**大六地区**（北谷古賀、前（マエ）古賀からなる）、**志田原地区**（１班から６班まで）、**古子地区**（前古賀、裏古賀からなる）、**中渡地区**の４地区がある。

現在は使われていないが、場所を特定する場合の地名として、丹坂、北目、高畑（いずれも大六地区）、田端（古子地区）がある。なお、北目については、河川名「北目川」として残っている。

北下久間区のお祭りと行事

3月下旬～4月上旬　花見

大六地区北谷古賀では、現在も家まわしで花見を行っている。

志田原地区２班では、当番を家まわしで行い、花を愛でていた。最近は料亭等に出向いて懇談会を行っている。６班では、北部公園に弁当を持って集合し、桜の木の下で花見を行っている。

6月下旬　さなぼり

他地区と同様に田植え作業を労う行事で、現在は、南・北下久間両区の役員が八幡宮に参拝したあと、大区長（両区のとりまとめ）の自宅で懇親会を開いている。

なお、志田原地区では、現在、老若男女が北部公園に集ってグラウンドゴルフ（以前は運動会を行っていた。）を行い、飲食を共にし、親交を深めている。

7月13日と12月13日　「道祖神」（さやん神さん）祭り

道祖神は、各地に道しるべや地域の守り神として祀ってあるが、志田原にある道祖神は、女性の象徴を形取った石仏で、両日とも神主さんに来所いただき、女性のみで神事を行っている。以前は大きなお堂があり、青年団が演芸会も開いていたらしい。また、流行病（はやり）に罹患した人たちの隔離地としても用いられていた。

1 道祖神

当番の女性は、各戸からお賽銭を頂いてまわり、菓子やお供え物を購入して、その一部を集まった子供たちに分け与えるなどして神事に参加させている。

更に志田原地区２班の女性は、春・秋の両彼岸にもこの祭りを実施し、「お遍路さん」の接待（オセッチャー）も行っている。

8月9日　四万六千日（しまんろくせんにち）祭り

社寺の縁日のひとつで、この日に参拝すると４万６千日お参りしただけの功徳があると言われているため、大六地区で30名ほどがお地蔵さんに集まり、輪に座して大きな数珠を回して縁日を行っている。

2 四万六千日が行われるお地蔵さん

大きな数珠

8月9日・10日　天神祭り

９日に治福庵に灯篭に灯りを付けに集まる。翌10日の午後７時頃から古子地区の区民が自宅から料理を持ち寄り、この日を祝っている。

8月31日　かざび（風祭・風神祭）

台風の禍を避けるために祈り、八幡宮にて「北下久間浮立クラブ」を中心とした区民で浮立を奉納後、公民館にて懇親会を開いている。

9月15日　八幡宮夏祭り（６区で、６年に１回担当する）

毎年、６区（堤ノ上、中通、牛坂、南下久間、北下久間、光武）の持ちまわりで実施している。北下久間区は、平成26年度に担当した。

11月3日　八幡宮秋季大祭（6区で、6年に1回担当する）

「八幡宮夏祭り」と同様に6区の持ちまわりで、氏子たちによって開催されている。北下久間区は近年では平成28年度に担当し、他地区同様に神事、浮立奉納、神輿行列等盛大に執り行った。

鉦浮立奉納

11月上旬　区グラウンドゴルフ大会

区民総出で北部多目的広場にてグラウンドゴルフ大会を開催している。個人戦で優勝旗を争奪して楽しみ、終了後、現地にて飲食を共にした懇談会を実施している。毎年、80人ほどの参加で賑わう。

優勝めざして!!

11月15日　お日待ち

現在は北谷古賀で実施している。家まわしで担当し、餅をついてお日様に感謝の意を込めて供えている。

12月1日　神待祭り（かんまつり）

他地区同様に、八幡宮にて御札を賜り、玄関に榊を飾るなどして、各地区別毎にそれぞれ神事を行い、懇談会を行っている。

過去の産業≪跡地≫

井上製蝋・製油所

3 井上製蝋・製油所（元社長 井上誠吾氏とその母）

古子地区に井上製蝋・製油所があった。塀に大きく「井上製蝋所」の文字が残る立派な居宅は現存する。

製蝋所の元を辿れば、久間小学校の裏の後山あたりにハゼの木が多く生えていたため、井上和右衛門の息子小一が蝋燭の製造をはじめたことにある。その後、和右衛門の孫権七が台湾に渡って石鹸工場を成功させ、久間に帰還するにあたり、蝋燭と菜種油の製造販売を始めた。

夏になると地域の農家の方々がリヤカーに菜種を積んで来て、搾油する間、玄関の座敷や廊下で横になったり、おしゃべりをしたり、弁当を食べたりして待っていた。自宅で消費する分の食用油はそれで賄っていたものと思われる。また、秋になると村人たちは蝋燭の原料のハゼの実をもぎ取って収穫し、リヤカー等で運び込んでいた。当時は、三輪自動車が一台あり、運転手一人と油の製造の工場で働く近隣より男手が二人の小規模な事業であったが、しばしば税務署の調査が行われていたことから、それなりの売り上げはあったものと思われる。

戦後、電気が普及し、生活水準が上がっていくにつれ油の消費も増え、大手企業が製造を始めたため、井上製蝋・製油所もその役割を終えることとなった。庶民は、塩田の森鉄屋を「てつや」、江口米屋を「こめや」、井上蝋屋を「ろうや」と呼んでいたので、子ども心に「ろうや」っていやだなと思っていたものである。

（元社長 井上誠吾氏の長女 奥脇えい子氏より）

伝承芸能について

「北下久間浮立クラブ」について

当クラブは、約40年ほど前、青年団活動の流れの中から、小野貞見氏（初代会長）の尽力により発足し、風祭の前には練習に励み、当日、八幡宮にも奉納するなどして今日に至っている。

風祭奉納

北下久間の史跡

治福庵（寺）

北下久間古子に本應寺の末寺がある。庵の創立については、詳しい資料に乏しく八幡大菩薩の祈祷寺であったと伝えられている。

現在の庵は、昭和１１年井上権七氏の寄進により再建されたものであり、境内には井上氏の頌徳碑が、大六･古子地区の区民により建立されている。

4 治福庵（寺）

たっちゅう（舘中・塔中）さん供養塔（治福庵の前方）

慶長18年（1613）藩のおきてにふれ、本藩主勝茂公より切腹を命ぜられた久間城主鍋島茂治公、その子鍋島織部充、茂治公の奥方と長女の４名の供養塔である。

当時は、他藩の方との縁組はご法度（禁止）であり、長女が肥後の国の家老と結婚されたことがご法度を破ったとして茂治公一族に切腹を命ぜられ、18名の家来も殉死した。切腹後33回忌の供養の時にこれが建立された。

（中島哲太郎　著「鬼樒城」より　参考：森敏治　著「塩田昔話」

※P58の「二人の寄塔」もご参照下さい。

5 たっちゅうさん

丹生野の堤と畑田・古子の稲作

天和年間（1680年頃）に、上久間村の庄屋を務める原田願左衛門重氏という方がおられ、地元では願海（がんきゃー）さんと呼ばれて親しまれていた。下久間の畑田、古子地区丘陵地を水田に作り変えるために丹生野の堤を大きくかさ上げして古子堤に至る導水路を作った。導水路を作るに当っては、高低差を測量するのに夜提灯を方々につるす、いわゆる提灯測量を用いたと伝えられている。

導水路（権現山付近）

また、願海さんは、志田原地区の灌漑も進めるため、久間小学校下の志田原堤の建設にも関わったものと伝えられている。いずれにしても庄屋として地域の人々の暮らしを豊かにするために尽力し、数々の功績を残していたため、「がんきゃーさん」と慕われ、後世までその名を馳せている。墓石は丹生寺にひっそりと建てられている。

（中島哲太郎　著「鬼樒城」、森敏治　著「塩田昔話」、
坂本紀美子　著「がんきゃあさんが通る」より）

※P59の「願海さん」もご参照下さい。

6 古子堤

丹坂（アカサカ）古戦場跡 7

下久間の一地名の丹坂とは、血染め坂の意味である。永正４年の戦いをはじめ幾多の激戦があったところである。往古長崎街道の通路は、塩田から舘中に出で、現在の治福庵の西側からこの丹坂を越え、西山を経て成瀬（鳴瀬）に出ていたものである。

（久間村郷土誌より）

久間に伝わる詩

わたしゃ辻、久間、久間村育ち、守れタッチウさん、惟盛様よ。

このように久間を詩われている。

（久間村郷土誌より）

志田原店屋（しだばるみせや）の面影　～昭和30年代の記憶～

志田原は、現在の国道498号線沿いに形成された60数戸の地区である。明治38年に鹿島～武雄間に祐徳馬鉄が開通し、そのちょうど中間地点である志田原の旧寺井家向い側（現コインランドリー付近）に馬替え所（馬鉄駅）ができた。その後、軽便鉄道に変わり、更に、昭和６年には祐徳バスが走るようになって志田原にバス停ができたため、武雄や鹿島方面へのバスの利用が便利になった。

志田原には昭和４年にモダンな洋風モルタル造りの久間村役場が落成し、その後、役場の隣には久間村農会（ＪＡ）も建設された。また、久間小学校も近くにあって、志田原は久間村の文教行政の中心地であった。

こうした立地に恵まれた志田原地区では、人の往来が頻繁になり、道路沿いの両側には、次第に店屋が建ち並び、近隣地の人達も志田原へ買い物に来るようになった。

昭和25年頃になると志田原の店屋には米屋、魚屋兼割烹、酒屋、薬屋、菓子屋、衣料品店、雑貨屋、学用品店、時計屋、自転車屋、娯楽施設などあらゆる生活用品が小規模ながら店頭に揃うようになり、買い物が楽しめるようになる。その店屋の数も志田原県道約１キロの両側にはおよそ40店舗以上が存在していたのではなかろうか。

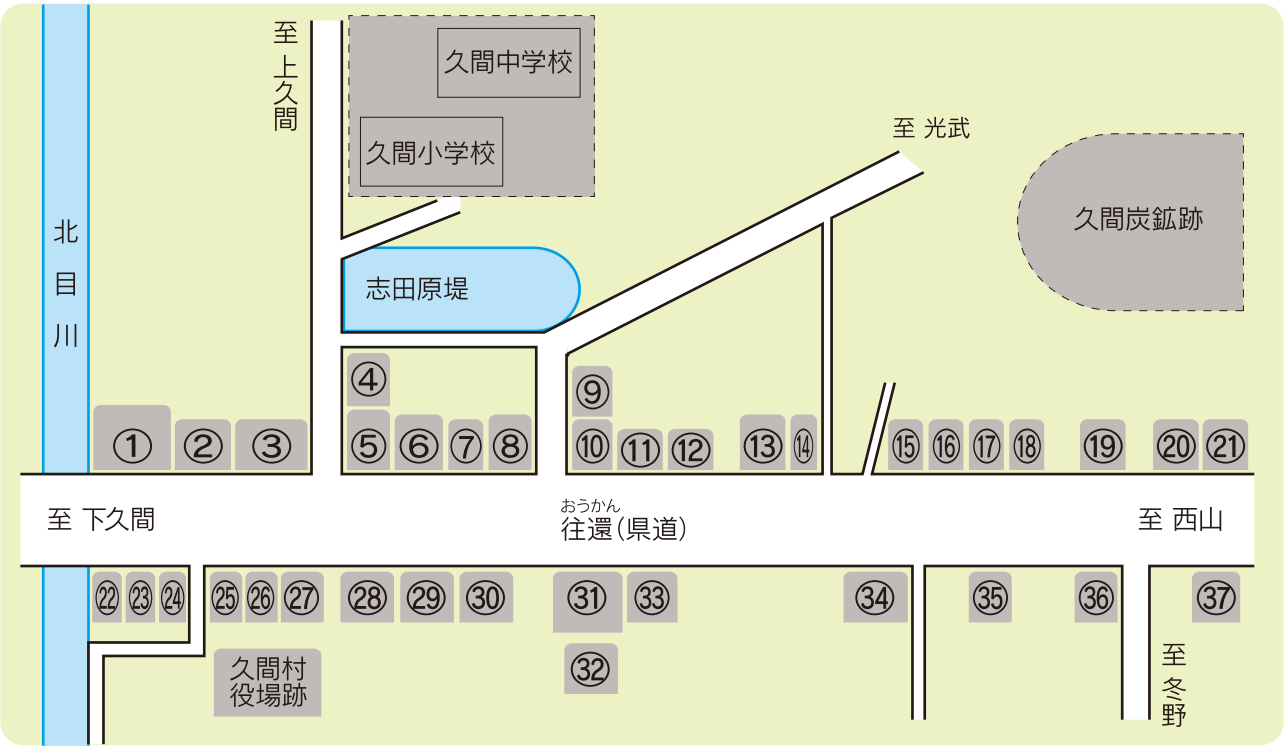
昭和60年頃より大型店の攻勢時代が始まり、地域の小売り商業は受難の時代を迎え志田原店屋も徐々に減少しつつある。（次頁の図参照）

（北下久間区志田原　大川内謙司氏より）

※店屋（みせや）：店を構えて商売している家

志田原店屋の面影　～昭和30年代の記憶～

①篠田医院
②松永文具店
③山口菓子屋 武富キャンディ屋
④江口製縄所
⑤梶原文具店 中村たばこ屋
⑥上滝魚屋
⑦寺田時計屋
⑧井手薬屋（倉庫）
⑨平野襖はり屋
⑩光武八百屋
⑪中村衣料品店
⑫石井床屋
⑬杉光酒屋
⑭パーマ店
⑮杉光魚屋
⑯田中畳屋
⑰久間郵便局（斎藤）
⑱松尾助産院
⑲水江店（停留所）
⑳山口精米所
㉑炭団屋



㉒田中編物教室
㉓西野建具屋
㉔光武自転車屋
㉕つるや（香月店）
㉖野田電器屋
㉗台湾店（衣料雑貨）
㉘山口米屋（停留所）
㉙小野魚屋 井手薬屋
㉚緒方まんじゅう屋
㉛久間農協
㉜精米所
㉝丸福クリーニング店
㉞高井石工（石塔）
㉟杉光綿打ち屋
㊱鍛冶屋
㊲糸山染物屋

11. 牛間田区

牛間田区の来歴

牛間田区は、当時の佐賀県知事宛て「杵島郡有明村と藤津郡久間村の境界変更についての申請」が受理され、地方自治法第7条第1項の規定により昭和30年11月1日から杵島郡有明村のうち次の区域（上牛間田地区）を藤津郡久間村に編入されることとなりました。

そのときの久間村側の理由として、「同地域（上牛間田地区）は、人情、風俗及び生活状態にも共通するところが多く地理的にも接近し、又水利上、産業上密接な関係を有し、教育に至りては38ヶ年有余久間村に通学し現在に至り、むしろ久間村に編入し基礎強固な自治体を作り将来の発展を期そうとするものである。」とあります。　（有明町史）

※P83に掲載している久間村合併（編入）時の記念写真をご覧下さい。

今も残る地区名と古賀名

牛間田区には、上古賀、中古賀、岩崎地区を含む南古賀の３古賀がある。

現在は余り使われないものの、山田、ハッジヤマ、ツンマル、ケンヅシ（剣突）など今も残っている地名もある。

古渡には、昭和２年の百貫橋完成までは「古渡し（牛間田渡し）」と呼ばれる渡し場があった。　（有明町史）

その後、昭和の初期頃、リヤカーや馬車が通れる木造の橋が造られたようである。

昭和38年の大水害でこの木造の古渡橋が流されたので、新たに現在の橋が造られた（昭和42年）。

ケンヅシ（剣突）峠

橋名称

現在の古渡橋

牛間田区の歴史・史跡・石造物等

牛間田天満神社（牛間田天満宮）

峠の西側にある小高い丘に菅原道真公を祀る牛間田天満神社がある。社伝によれば990～995年頃、当時の冬野村、杵島郡牛間田村（上牛間田、下牛間田）の両村の氏神として創建されたという。牛間田、冬野からはもとより、久間・塩田地区の方々からも尊崇あつい神社である。毎年8月25日の夏祭りをはじめ、数々の神事が行われている。

拝殿まで5柱の鳥居があり、一の鳥居は昭和8年7月、陸軍大将武藤元帥の奉献による。また、境内には、数基の燈籠、狛犬、絵馬、石の祠などが寄進されている。

（詳しくは、P3をご覧下さい。）

境内の一角には、樹齢500年といわれる大木「イチイガシ」の木が聳え（樹高21m、幹回り7.3m）、平成16年に「佐賀の名木・古木100選」に選ばれている。

（森敏治著「塩田昔話」・塩田町史より）

一の鳥居

1 天満神社とイチイガシ

牛間田観音尊

牛間田区南古賀の泉のほとりに、天和2年（1682年）に西冬野村講衆、東冬野村講衆の皆さんの寄進で建立された石造りの牛間田観音尊がある。泉のほとりに何を祈願して建てられたわからないが、観音様は静かに見守っておられるようである。

2 牛間田観音尊

岩屋の観音様

牛間田区と白石町との境の岩崖に「岩屋の観音様」が祀られている。

3 岩屋の観音様

弘法大師の石仏

大正10年9月、牛間田区（当時は、上牛間田地区）により「弘法大師石仏」（右側）が建立された。ここには、新四国、塩田八十八ヶ所第二十七番札所がある。左側に「薬師如来尊」を祀られている（時期不明）。

4 弘法大師の石仏

釈浄西法子と大師尊

上古賀には、文化3年（1807年）4月21日に建立された釈浄西法子（左側）の地蔵尊が祀られている。

また、その右側には、大正8年9月、上牛間田区（当時）で建立された「大師尊」（右側）も祀られている。

5 釈浄西法子と大師尊

御不動様

天満神社の西方に本應寺（塩田町馬場下）の庵寺として建てられた稍願寺（建立時期は不明）がある。この中には仁王像（左）、木造りの観音菩薩像（右）が祀られている。

建屋は、昭和6年7月22日に改修され、更に平成5年2月～4月にかけ、現在のものに立て替えられている。

旧・稍願寺

御不動様建屋

6 御不動様

牛間田区のお祭りと行事

1月1日～3日　天満神社への初詣

区内の氏子に加え、他地区からも参拝者がある。事前に区長が飾り付けを行い、御神酒や屠蘇酒を準備している。

2月25日　天満神社例祭

菅原道真公の命日に合わせ、牛間田区（上牛間田）、現白石町牛間田（下牛間田）、冬野区の氏子が参加して、午後２時頃からお供え物及び御神酒を神前に飾り、宮司さんに来て貰い神事を行い、玉串奉奠（ほうてん）を行い参拝する。

参拝後、上牛間田公民館に集まり、上牛間田の役員で準備していただいた豚汁や御神酒等を振る舞って３地区の氏子で親睦を深めている。

例祭神事

6月末～7月初め　お礼参り（田祈祷）

田植えが終了した頃、上牛間田、下牛間田、冬野の３地区の役員が早朝から天満神社に集合し、境内の掃除、神前の飾り付け等の準備をする。午後、２時頃から宮司さんをお呼びし、各農家の人たちも参加して神事を行う。その後、参拝者全員、各地区の役員さん方が、それぞれに竹輪、天ぷら等の煮物を準備して神殿前で御神酒等いただき、田植えが無事に終了したことへのお礼と秋の豊作を祈願し、互いの慰労と親睦を図っている。

7月17日　牛間田観音尊と岩屋観音様の燈籠あかし

昭和20年代までは、区の青年団員の女性により行われ、、夜間に区民がお参りに訪れた際にお茶や煮炊きした豆などを振る舞っていた模様。現在は、南古賀のご婦人方により、燈籠あかしが行われている。

牛間田観音様

岩屋観音尊

7月24日　釈浄西法子の地蔵尊まつり（上古賀）及び　8月8日の薬師如来様のお祭り（中古賀）

上古賀にあるお地蔵さんと中古賀にある薬師如来様のお祭りは、昭和33年頃までは、地区の小学５年生から中学３年生までの男子が中心となって、祭り前日に各戸を廻って「お茶、豆、燈籠銭を下さい。」と願い出ていた。いただいたお米と空豆は、地蔵尊近くの２軒の御宅のご厚意で炊いておにぎりを作り、昼食とし、また、空豆は、夜間にお参りなさる人々に振る舞っていた。

その後、時代が進むにつれ、安全面から子供たちの帰宅時刻が遅くならないよう制限されることとなり、子供たちに代わって婦人の人たちで燈籠あかしを行うようになった。また、振る舞う品も茶菓子に替わっている。

7月28日　「御不動さん」灯篭（燈籠）祭り

昭和35年頃までは、青年団員が鉦浮立を公民館からお不動さんまで移動しながら奉納していた。子供たちもほうずき提灯を持って行列に参加するのが楽しみで、先を競って提灯を取りに行った。お不動さんでは、夜10時～11時頃まで鉦浮立をあげ、煮豆などを参拝者に振る舞うなどして賑わっていた。

その後も昭和63年頃までは青年団員により燈籠あかしだけは行われていたが、現在は区の役員により参拝者に茶菓子を振る舞うにとどめている。

8月10日　念仏慰霊祭

昭和24年頃までは、男性青年団員が朝から青年宿（特定の家）に集って「でんがく」等を作り、昼に参拝者に振る舞っていた。昭和25年以降は、満州事変と大東亜戦争の戦没者11名を祀って、本應寺住職にお経をあげてもらうようになった。

大数珠

現在も御不動様建屋の中で、読経後、皆で大きな数珠の回りに座り、鉦や太鼓の音頭で「南無阿弥陀仏」と称えながら数珠を回してお参りをしている。

8月25日　天満神社夏祭り（燈籠）

昭和36年頃までは、上牛間田、下牛間田、冬野の３地区の順番で、青年団員が２か月前位から踊りや俄劇（にわかげき）等の稽古に励み、当日の午後７時頃から開演していた。

当時は、地元は元より、地区外の人たちも集まり、屋台などのお店も軒を並べて出店するなど大いに賑わった。子供たちは、１週間前位から舞台前の観覧に適した場所に陣取るため、毎日出向いて席を確保し続けたものである。

天満神社夏祭り

青年団がなくなった後は、各地区の役員で、昼間、宮司さんをお呼びして神事を行い、夜、燈籠あかしをしながら参拝者に茶菓子等を振る舞っていた。

その後は、３～４ヶ年間ほど、上牛間田の三夜待（二十日会と十二日会）が合同でカラオケ大会を開いて奉納したものである。

現在は、３地区の回し持ちで燈籠あかしを担当している。昼間に神事を行い、参拝者に煮物を振る舞いながら御神酒をいただいて親睦を図り、午後１０時頃には終了している。

（詳しくは、P４の天満宮神社の思い出をご覧下さい。）

8月31日　かざび（風祭・風神祭）祈願祭

３地区合同で準備にかかり、午後２時頃から他地区同様に神事を行い、親睦を図って、災害が発生しないよう祈願している。

昭和36年頃までは、３地区の青年団がそれぞれの地区の浮立を奏でて集まり、夜７時頃から夜を通して奉納していたが、青年団の衰退と共に浮立が途絶えた。

しかし、３年前に冬野地区で浮立が復活され、現在は冬野区の皆さんによる浮立奉納がなされている。

9月の彼岸の入りの日（9月17日頃）　井手祭り

水田圃場の西側の入江川に堰があり、その傍らに水神様が祀られている。

この堰は、田植えの準備が始まる６月上旬に閉められ、稲が実る10月中旬解放するまで水田に水を注いでくれる。井手祭りはこの水神様に感謝するための祭りで、農家の皆さんが公民館に集まり、水神様に供えた御神酒をいただきながら、その年の作柄等を話すなどして懇談している。

⑦ 水神様

12月1日　神祭り（神待ち祭り）

上牛間田、下牛間田（現・白石町）、冬野の３地区の役員が早朝から天満神社に集合し、境内の掃除、お供え物の準備をして、午後２時頃から宮司さんをお呼びし、参拝者を含めて神事を行う。神殿前では、役員が準備した煮付け等で、御神酒をいただき、親睦を図り、午後４時頃終了する。

その後、牛間田区では、各古賀で家まわしで夜６時頃から当番の家に夫婦で集まり、折り詰め等を食べながら懇談している。以前は子どもも参加していたので、お祭りでいただく食べ物が美味しかったことを思い出す。

12月下旬　天満神社注連縄（しめなわ）作り

正月の参拝に備え、牛間田区の役員を中心とする人たち12～13人ほどが朝８時頃から集まり、境内の掃除、神殿のすす払いを行ってから、「注連縄づくり」を行う。

これに備え、区長は前もって藁を確保し、これを脱穀機を用いて縄を綯（な）いやすいように整えておく（すぼいておく）。注連縄は、５人１組で境内にある舞台の梁に藁をロープで掛けて３人で縄を綯っていく。綯っては吊り上げ綯っては吊り上げしながら直径12ｃｍ位の大きな縄を17ｍ程の長さに綯う。これより少し短いもの２本の合計３本綯って一の鳥居、神殿前、御神体前に飾り付ける。

神殿前の注連縄

地域に伝わる昔話・こぼれ話

「雨乞い祈願」

昔、この地で厳しい干ばつが続いたある日、白装束に身を包んだ地元の男性数人とご婦人方数人は、雨乞いをするため稍願寺（庵寺）に安置されていた菩薩像を担ぎ出し、岩崎の入江川沿いにあった船着場まで行って水に浸けたあと、大谷溜池横を通り抜けて杵島山の頂に登った。越えた辺りにある岩山（白岩山（しらいわさん））には山の菩薩とおぼしき石造りの祠が祀られていて、菩薩像をここまで担いで登って来て熱心に雨乞いをなさった模様。その甲斐あってか、その後、雨が降ってきたとの言い伝えがある。なお、祠には白蛇が居たという話もあるようである。

（志田勝英氏の聞き取りによる。）

白岩山の菩薩像

「おしまさん参り」

当時は、有明海に浮かぶ伝説を秘めた沖ノ島に舟で渡り、有明海の守り神として祭られている「おしまさん」に青年団を中心に浮立を奉納し雨乞いや豊作祈願をする風習があった。

大正５年の記録によると、7月17日、日中から支度を急ぎ、午後10時に塩田のお倉の浜（塩田津）に着いてお舟「恵比寿丸」に乗り込んだ。当夜のおしま参りは、上牛間田、堤ノ上、牛坂の３ヶ所からであり、お倉の浜近辺や塩田川ほとりには、数千人の見物人が詰めかけ、盛大に行われた。18日の午前４時にお島、め島に到着し、1時間ばかり上陸し浮立奉納・祈願をしてから帰路についた。午前９時には、無事、塩田港に着いたとのこと。当時の賑わいを思い起こさせるものである。

（牛坂区青年団会誌を参考に、志田勝英氏への聞き取りによる。）写真：鹿島市農林水産課より

沖ノ島のおしまさん(沖髪大明神)

＜おしまさん＞　江戸時代に有明海沿岸地方が干ばつに見舞われたときに雨乞いの願をかけた村娘「おしま」が有明海に身を投げ、まもなく沖ノ島に流れ着いた遺体が発見されたところ、大雨が降り豊作となったことで、おしまをこの島に沖髪大明神として奉り、雨乞いの神様として信仰している。（鹿島市農林水産課による）

過去の産業

・博多人形工房

南古賀で昭和44年頃（平成10年まで）、坂井勝行氏は「人形工房」を設立し、**博多人形**の製作を行っておられました。美しく形作られた素焼きの人形に、品良く絵付けをして製品化。当時は、地元の人たち14～15名ほどが製作に携わっておられたとのことです。

地域の著名人

・彫刻家　平川 正 氏

大正12年牛間田区上古賀で、氏族の末裔・平川家で大工 峯作の長男として生を受けたので、平川正氏は、父の弟子として大工の腕を磨き、長年、一流の棟梁として数多くの家屋を建ててこられました。時には、自ら彫った欄間を飾り入れるなどしながら活躍なさいました。

晩年になると、田畑を耕作しながら「面浮立」の面を彫りはじめ、さらに対象の幅を広げて熊や獅子などの動物類、布袋像なども彫るようになり、やがて、佐賀県すこやか長寿祭シルバー作品展、ねんりんフェスタさが作品展等各種展覧会に作品を出品することとなり、ついに平成９年には、ねんりんフェスタ97さがシルバー作品展で「岩の上のリス」が佐賀県知事賞を受賞、また、平成21年には、佐賀県高齢者美術展でも「玉と獅子」が佐賀県知事賞を受賞なさるなど、数々の輝かしい業績を残されました。（正氏の長男、次男及び親族２名への聞き取りによる。）

岩の上のリス

玉と獅子

・関東軍司令官 武藤元帥

武藤信義元帥は、1868年現在の白石町牛間田に生を受け、陸軍士官学校、陸軍大学校を首席で卒業して主要な軍務を歴任し、関東軍司令官、満州国駐在特命全権大使として活躍した。元帥没後、もっとも関係が深かった旧満州国との親善のため、出生地の牛間田（母校の旧牛間田分校前）に献穀田が設けられ、満州国に産した糯の種籾と、牛間田に産した糯の種籾を交換して栽培し両方でとれた糯を混ぜ合わせて餅を搗き、双方に献上した。このようなことことから、生家の前に雄大な武藤元帥記念碑が建立された（現在は、旧牛間田分校跡地に移転されている）。　（「有明の文化財」より）

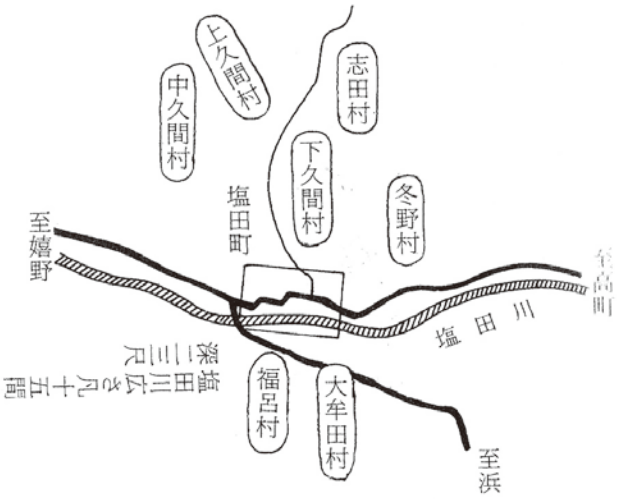
武藤元帥の碑

○昭和30年の久間村合併(編入)記念写真（牛間田天満神社前）

12. 中久間区

中久間区の来歴

「中久間」と称される地名は、明治18年（1885年）に編纂された「佐賀県肥前国藤津郡村誌」によると、統合され久間村となる以前の江戸期正保３年（1646年）に幕府に献上された「正保国絵図」に中久間村、禄高二百五十五石余とあり、正保年間に「中久間村」と称される地域があったことがわかります。これから60年後に作成された「元禄国絵図」にもはっきり「中久間村」が描かれています。その後、いつの頃からか「中久間村」の記述が見当たらなくなります。



『正保国絵図』より

現在の中久間区は、蓮池藩下の武士の調練場に位置します。調練場は、蓮池藩下の安政年間（1855～1860）に、武士に洋式戦術演習を行なわせ、武士の士気高揚と技術向上のため鍛錬させていた場所です。昭和13年頃以降に入ると農民道場となり、サツマイモを栽培するなどして食糧増産に励んだようですが、詳細は不明です。

（塩田町史上巻より）

その後、昭和21年に炭鉱が開坑され光武炭鉱となりましたが、その集落は昭和36年に閉山するまで行政区には入っていませんでした。

昭和36年、旧久間炭鉱と光武炭鉱敷地をもって「炭鉱部落」とすることで行政と取り決め、同年4月に行政区に入りました。**昭和37年7月より「中久間区」**と改称され現在に至っています。

◆「中久間区」名の誕生秘話

当時は炭鉱部落と称していましたが、閉山して炭鉱はなくなったにもかかわらず、いつまでも炭鉱部落と呼ぶのはおかしいのではないかと言うことで、住民より部落名を公募することとなりました。

当時、炭鉱の売店の店主であった故・小田サトさんの応募作に「中久間」とあり、選考委員会で上久間と下久間の中間に位置するところであるので良い名称だと評価され、これが採用されて中久間区が誕生したとのことです。

久間炭鉱と光武炭鉱の変遷

○久間炭鉱

久間炭鉱は、現在の西部道路（株）・杵藤アスファルト合材センター・（有）蒲原鋸加工所等の工場のある場所にありました。

明治9年6月16日、三潴（みづまけん）県（当時の府県統合により佐賀県も含まれていた）の参事 松平太郎は、当時の工部卿 伊藤博文にあてた開坑願いを提出しました。久間村には、良質な無煙炭があることが知られ出炭していて、明治21年の佐賀県統計書にも藤津郡一とあります。

大正5年頃は、石炭の需要に応じて採掘して灯りがともり、需要がないときは灯りが消えるのを繰り返していたため、蛍の点滅をもじって「ほたる炭鉱」と言われていました。

炭鉱施設イメージ図

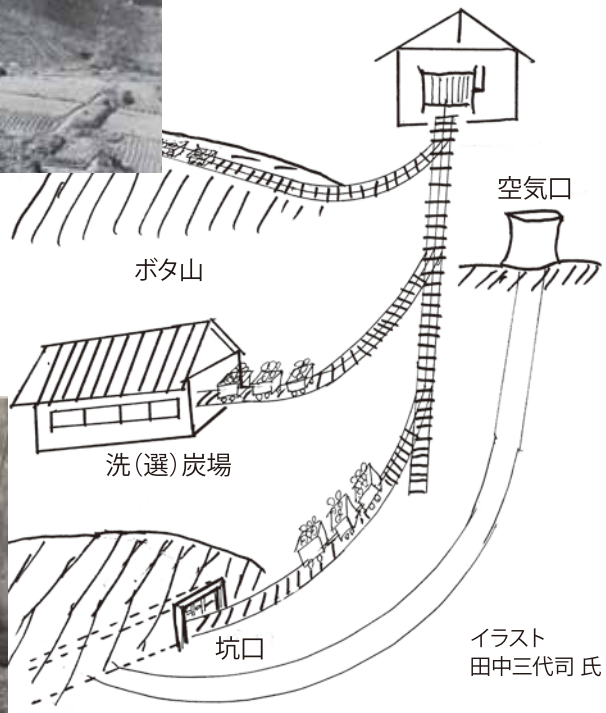


イラスト
田中三代司 氏

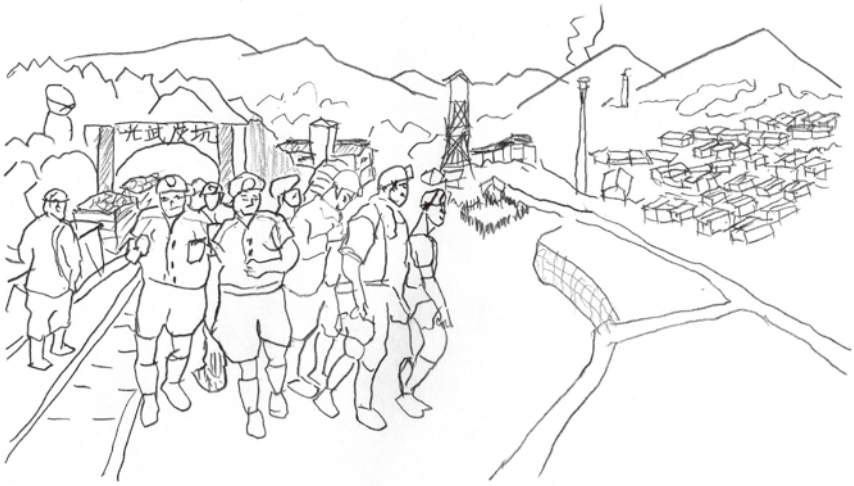


イラスト
鐘ヶ江俊和 氏

坑内で働く人々（山本作兵衛　炭坑画集より）

採掘現場

昭和5年頃は採掘していなかったようです。昭和7年6月、角口菊蔵が試掘に着手し昭和9年11月試掘を完了。その後、昭和13年12月1日に久間炭鉱が再び開坑され、昭和14年から出炭を開始しました。

中嶋藤義（元区長）によれば、久間炭鉱の埋蔵量は110万トンと言われ、良質な無煙炭を出炭していたとのこと。戦時中は男手が無く、女性も坑内に入って働いており、また、開坑記念日の「山の神まつり」は、盛大に行われていたとのことです。

角口憲基（菊蔵の子）によれば、久間炭鉱は、佐賀県石炭採掘登録第一号で、良質の無煙炭は7,300～7,800カロリーあり、優秀炭であった。戦時中は、石炭の需要が多くなり、県知事や警察署長など国や県の重鎮が増産激励に来られていた。戦後は、エネルギー革命により閉山に至ったとのことでした。

ホサキ

カンテラ

炭坑の道具

ツル

○光武炭鉱

光武炭鉱は、本坑〈第1坑〉は、現在の（株）一ノ瀬畜産工場の場所にありました。

昭和21年8月、小岩鉱業により開坑され、昭和22年に着炭して盛大に着炭祝いが催されました。

昭和22年中に出炭目標を突破して福岡商工局佐賀県石炭増産推進委員会より、目標突破の表彰を受けました。当時は、月産約1,000トンであったとのことでした。

1 本坑にて　光武炭鉱着炭祝　昭和22年

出炭目標突破の表彰式

光武地区に第1坑《本坑》と久間小学校の南側に第2坑があって、昭和27年には併せて10,400トンを出炭し、130名の従業員が増産に励んでいました。

光武炭鉱は、出水との戦いで採算に合わない上に、エネルギー革命の煽りもあり、久間炭鉱より早い昭和29年に閉山するに至りました。その後、野村鉱業（改称して光和炭鉱）など4社ほどの鉱業会社が次々に採掘を目指しましたが、出水には勝てず、昭和36年に完全に閉山に至りました。（参考資料　塩田町史上巻）

炭鉱時代のくらし

○女性たちの仕事

女性たちは、洗（選）炭場と呼ばれた作業場で、坑内から上がってきた採掘物を洗いながら石炭とボタに選別していました。ボタは次々に捨て場所に運ばれて積み上げられたため、次第に高くなって山のようになり、ボタ山と呼ばれました。

※ボタとは、石炭ではない岩石や土砂のこと。

2 洗（選）炭風景

選別された石炭は一定の大きさに割って水洗いをして出荷します。石炭を割るとき出る粉を粉炭といい、これを豆炭工場に出荷すると豆炭や練炭に加工されていました。

選別された石炭は、トラックで当時の国鉄の石炭積み出し駅に運び出しました。出荷の際は、女性たちがスコップでトラックの荷台に積み込み、石炭と一緒に荷台に乗って駅まで行き、貨車に積み込んでいました。このような一連の作業をする女性たちは「洗炭婦」と呼ばれていました。

洗（選）炭婦

○共同風呂

地区には、風呂が一ヶ所（現在の中久間区公民館敷地）あり、男女共同風呂で、ホテルの大浴場のような大きな浴槽であったので、友達を誘い合って行き、ワイワイガヤガヤ騒ぎながら風呂に入ったものです。子供の頃は、体が小さかったので、浴槽を大きく感じていたのだろうと思います。

3 共同風呂イメージ図（筑豊地方）（山本作兵衛　炭坑画集より）

○他の地区と異なる炭鉱の住まい

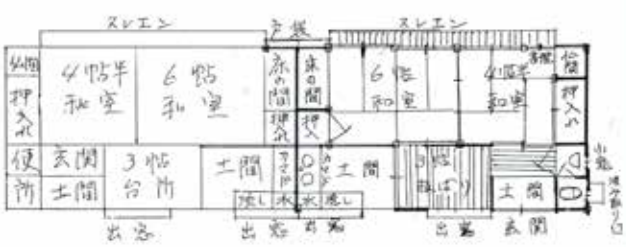
炭鉱で働く人たちは、ほとんどが「炭住」（社宅）と呼ばれる２軒や３軒の長屋で生活をしていました。コンパクトな家屋の中に生活に必要な部屋が一通り揃うなど間取りも効率的な作りとなっていました。

面影をのこす炭住

○子供の頃の思い出（子供たちの日課）

子供たちは、学校から帰ると一番に行うことは水を汲むことでした。地区には、井戸が一ヶ所（現中久間公民館の敷地内）にしかありませんでしたので、皆、井戸から自宅まで2個のバケツに水を汲み『おうこ（朽）』で担ぎ運びました（おうことは天秤棒のこと）。

日曜日には、ボタ山に行き、ボタの中からカスガイを使って石炭を拾い、これを持ち帰って家庭の燃料にしました。七輪に火をおこし、夕食の準備をして父母の帰りを待っていました。



炭住の間取り

家庭によっては、カンテツという直径30cmほどの鉄管でつくった七輪に火をおこしていたとのことでした。

◆石炭について

当時は「黒ダイヤ」と言われ、日本の産業を支える燃料であった。

石炭は、植物が堆積し、地中に埋没し分解作用や地熱、圧力などによる偏執作用を受けて炭化生成が進み可燃性岩石になったもの。また、生成年代によって異なるが、特に古生代二畳紀のものが高度瀝青炭や無煙炭となっている。

石炭になった主な植物は、古生代石炭紀に繁茂していた蘆木類の一種のアステロフィリテスという植物と思われる。

なお、日本の石炭は、新生代第三紀に生成されたものである。

石炭の石

参考資料　平凡社　世界大百科事典13巻より

中久間区のお祭りと行事

○山の神祭り

窯業の陶山社等と同じように、炭鉱にも「山の神」がありました。炭鉱の「山の神」は、犬を神として祀り、崇拝して山の神まつりが執り行われていました。今日では、開墾されて「山の神」の祠がどこにあったのかはよくわかりません。

中嶋藤義によると、当時はよく犬の肉を食していたとのことですが、山の神として犬を祀っているため、犬の肉を食べた人は坑内に入れなかったとのことです（酒席での話）。

4 第3回山の神まつり　昭和35年4月20日

大正年間に子ども達が歌った『藤津郡唱歌』（一部抜粋）

路を転じて志田に出て石炭坑の有様も　学びのために探り見て再びもどる塩田駅

この歌で当時から出炭していたことがわかる。（参考資料　塩田町史上巻）

○区民運動会

中久間区には、季節ごとのお祭りや行事等は何もありませんが、区の行事として、以前は運動会を10回程開催していました。

平成元年　区民運動会

○グラウンドゴルフ大会

その後、三世代交流事業として子ども会の歓送迎会を兼ねて、北部公園でグラウンドゴルフ大会を始め、現在に至っています。

今年度も応援者を含めて60名以上が集いました。例年、８チームから10チームほどが結成され、２ゲームずつ戦って上位３チームを表彰式し商品を贈ります。終了後、その場でチームごとに車座になり、弁当を広げて飲食を共にして親睦を深めています。

平成30年4月1日

13. のぞえ区

のぞえ区の来歴

平成４～５年頃、塩田町大字久間字大草場野副に「旧塩田町」の人口減少対策として分譲宅地造成案がだされ、平成６年から住宅地造成工事が始まり、埋蔵文化財調査を経て、平成９年に造成工事が完了しました。そして、平成10年１月12日から宅地95区画の分譲がはじまり、平成11年に久間地区で13番目の行政区「のぞえ区」が誕生しました。誕生当時は20戸でスタートし、ピーク時には92戸を数え、現在は88戸とやや減少するものの90戸前後の集落として安定した住宅団地が維持されています。

当時の分譲予定地は、小高い丘陵地で、畑が広がっていました。その頃は、「のぞえ団地入り口（現　ファミリーマート横）から先には道は無く、森下溜池（冬野堤）横から畑まで南北に走る農道がありました。また、丘陵地の一角には墓地があり、現存しています（志田原地区の管理）。

聞き取り調査によると、江戸時代は鍋島本藩領で、元々は、官山（国の山）であったらしく、地域の人たちはそこで薪を採り、田や畑も耕していたようです。畑の境界に植えられて大木になった柿の木には鈴なりに柿が実っていました。これは「志田柿」として有名で、竹で作った高いはしごや、もぎ木、かご、ひもなどで、柿をもぎ取っては長崎や白石に「練り柿」として出荷していたようです。

鈴なりに実った柿の大木

整地前の現場

開発中の航空写真

整地工事中

区画整地工事

整地区域全景

区名の誕生

分譲後、入居7戸で始まった集落は、「北下久間区」に所属していました。その後、次第に入居者が増えてきましたので、話し合いにより平成11年に北下久間区志田原地域から独立して、新しく「のぞえ区」が誕生しました。

区の名称は、「快適でオシャレな“ニュータウン”の誕生」のイメージ（キャッチフレーズ）に合うように、地域の名称「野副」をひらがなの「のぞえ」に変更したとのことでした。（初代区長の去川氏による。）

大草場遺跡と遺溝

分譲宅地造成に伴い、平成６年10月３日より10月31日まで、約6,000㎡にわたり、埋蔵文化財の調査が行われ、大草場遺跡があることが確認されました。特に台地の南側に古墳時代から奈良・平安時代の集落跡が確認されました。

そこで、その集落の遺溝発掘調査が実施されることとなり、平成６年12月～平成７年３月まで、塩田町土地開発公社を主体に佐賀県教育委員会文化財課の指導も得ながら、当時の教育長をはじめとする組織を組んで11名の女性発掘調査者により執り行われました。

発掘調査参加者

遺溝発掘調査の結果、丘陵地の南側（約2,500㎡）で、当時に南北に走る農道の東側には古墳時代、西側には奈良時代から平安時代の遺溝が検出・確認されました。しかし、開墾と耕作により大部分が削平（さくへい）を受けており、保存が困難な状況であったようです。

＜確認された遺溝＞

・古墳時代
　竪穴住居跡１基、注穴群
・奈良時代～平安時代
　竪穴住居跡５基、
　掘立柱建物跡７基、
　井戸跡１基

（引用文献：大草場遺跡発掘調査報告書 1996.3塩田町教育委員会）

宅地造成の効果

若い子育て世代の人口増加により、「のぞえ区」は活気にあふれ、子どもたちも次第に増えて元気に遊ぶ姿をよくみることができました。また、若い人たちや子どもたちの活躍により町主催の各種球技大会等で上位の成績を収めたので、「のぞえ区」の存在が広く知れ渡るところとなりました。また、当時、塩田川で行われていた塩田川筏レースにも区の代表選手として女性陣も出場し活躍しました。<H12年7月16日　女性メンバー>

「のぞえ」の人口増加施策の成功に伴い、町外の多久や有明町等でも宅地造成が行われるようになりました。

塩田町バレーボール大会
ユーモア賞

のぞえチーム

いかだレース風景

○久間小学校児童数の増加

子育ての世代の入居者が次第に増えてきて、児童数の増加が見込まれたため、平成12年（2000年）9月から久間小学校の校舎増設が行われました。新校舎は木の香りが漂う木造平屋建て校舎で、5, 6年生の教室として使用されることとなりました。平成13年（2001年）3月7日には落成式が行われました。

久間小学校の児童数の変化は、平成11年258名（増築前）、平成13年267名、平成17年324名と増加したものの、平成30年177名と少子化の影響を受け、減少傾向にあります。

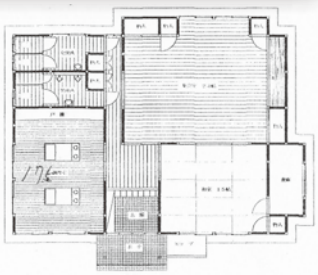
（久間小学校長より）

増設された校舎

○「のぞえふれあい館」（公民館）の完成

ニュータウンとして歩み始めたのぞえ区にとって、その運営会議や各種行事のための会場が早期に必要であったため、区長を中心に塩田町や町議会に陳情・要望を重ね続け、公的に手厚い支援をいただき、念願の自治公民館の設置にこぎ着けました。そして、待ち望んでいた公民館が区発足４年目の平成15年3月に完成しました。その結果、区民の集いの場として大いに利活用されることとなりました。<設計　川原 等 氏（元区長）>

❶ のぞえふれあい館



祭りや行事

○餅つき会（区発足当初3か年間ほど開催）

区の活動資金を調達するため、役所の支援と田んぼの地主さんの協力により、３反ほどの田んぼを借り受け、稲作を始めました。また、餅米も少し植え付けて収穫し、秋には区の活性化と区民の親睦を深めるために「餅つき会」を開催しました。また、借り入れた畑は、区民の「ふれあい農園」として希望者に貸し出し、一般野菜等の栽培を通して区民のふれあいを促しました。現在は利用されていないようです。

❷ 旧 ふれあい農園

○環境美化と親睦会

区内の環境美化（清掃）と親睦を深めるため、6月と10月の２回、区民総出による区域内の清掃を実施しています。以前は、終了後、公民館で飲食を共にした親睦会を開催していました。

○総会後の親睦会

現在は、のぞえ区の総会を３月の最終日曜日に開催し、終了後、区民揃って飲食を共にし、親睦を深めています。

○グラウンドゴルフ大会

秋に、区民の親睦を深めるため、久間小学校で区民グラウンドゴルフ大会を実施しています。昨年は、12チームの参加で、大いに賑わいました。上位成績者には賞品を授与、参加者全員に参加賞を授与しています。

親睦グラウンドゴルフ

○敬老会開催

毎年、９月中旬に70歳以上を対象者として敬老会を実施しています。ゲームや余興等で楽しんでもらっています。

役員や参加者による余興

○新入生歓迎会

小学校に入学した子供たちの前途を祝し、４月に公民館で保護者会が中心となって、ノートや菓子を配り、新入生を紹介しながら会食を共にする祝賀会を開いています。

○リサイクル瓶の回収

小学生を対象に、初めは春休みと夏休みの２回にわたり、各家庭を廻ってリサイクル瓶の回収運動を、子供クラブを中心に実施していました。現在は、児童数が減少したことにより、年に１回実施しています。収益は子供クラブ活動費に充当しています。

子供クラブによるリサイクル瓶の回収

○区民研修旅行等

子どもや大人の研鑽を積むため、研修旅行を実施していました。平成15年頃は親子で参加し、大型バス３台を連ねて玄海原子力発電所の施設を見学に行きました。現在は、人数が減少したため、７月にレクリエーションを実施しています。

○老人会（悠々会）の奉仕活動

悠々会では、年に２回区域の街路樹剪定、児童公園の除草作業等奉仕活動を実施し、食事会開催にて会の親睦を図っていました。現在は、ふれあい館において、女性を中心に２か月に１回、女子会を開催し、懇談や飲食等で会員の交流が行われています。

❸ 児童公園の清掃

○のぞえ区発足時からの組織等について

平成11年ののぞえ区発足時は、公民館がなかったことから、区会等の話し合いは、すべて区長宅で行っていました。のぞえ区には、地元民だけでなく町外、県外からの移住民も少なくなく、生育環境や文化等の違いから意見がまとまらなかったため、区長はじめ役員の方々は区行政の推進に苦労しながら尽力なさったとのことでした。

しかし、その甲斐あって餅つき会等の行事がはじまり、子育て世代の共通点も相まって区民の一体感が醸成されて今日の発展に至っているとのこと。現在は、区は６班で構成され、区長・公民館長・区会計・公民館会計（４役）のほか、体育部長、民生委員、交通安全協会員、小・中学校のPTA会長・副会長等の役員が置かれ、必要に応じて４役会議、全役員会議を開いています。

※参考：のぞえ区歴代区長（敬称略）

初代　去川多喜男	二代　櫨山　房雄	三代　江口　猛治	四代　木下　義昭
五代　川原　　等	六代　松澤　信廣	七代　大財　貞泰	

Ⅵ. 消防団のはたらき

嬉野市消防団　副団長　光武賢次郎（南志田）

我々、嬉野市消防団第３分団（久間地区）は、分団長１名、副分団長２名の本部役員に久間地区全体で５名の女性部員（本部付）と、西山・南志田・北志田部落より、団員数40名で構成されている第３分団第１部、冬野・牛間田・北下久間・南下久間・光武・中久間・のぞえの７部落から、嬉野消防団37部の中でも、最も多い団員数62名で活動している第２部、中通り・牛坂・堤の上より41名の団員で頑張っている第３部の第３分団総数146名（男性団員）で組織されています。火災や、水害、行方不明者の捜索等、緊急出動は元より、春と秋の火災予防週間の警戒、夏場に行う夏季訓練、年末特別警戒、年頭の消防出初め式、２年に一度は各部の名誉をかけて競い合うポンプ操法大会（昨年は、第３分団第２部が優勝しました）、それに毎月２～３回のラッパ隊による、吹奏訓練、また各部において、月２回のポンプ等器具の点検等々、年間を通じて、各部共頑張ってくれています。

消防団活動は、上からの指示によって下の組織が動くトップダウン方式を守って活動していますが、団員の年齢構成が25歳ぐらいから、40歳前後までの比較的若い組織のなかで、この縦割り構成をしっかり理解し、身につけて、「自分たちの地域は自分たちで守るんだ」を、合言葉に、年間を通して訓練における、分団別平均出動においても、第３分団は、80％前後を常にキープしており、各部、部長を中心に団員の意識向上をはかり、真剣に取り組んでいます。

久間地区での消防組発足は明治40年であり、大正13年に第３部を設置し大正15年に御大典記念事業として公設消防組となった。

大正14年10月に久間村に公設水防組が設立され、塩田川水系の水害時に活動した。

その後、昭和14年に合併し警防団を経て、昭和22年に消防団が組織され、その後昭和31年９月１日塩田町・久間村・五町田村が合併して塩田町消防団が発足し久間村消防団は塩田町消防団第３分団となる。

平成18年嬉野町との合併で嬉野市消防団第３分団となる。

参考資料　塩田町史より抜粋

おわりに

情報誌「和みのさと久間」を担当する総務広報部会では、地域を見つめなおし、誇りが持てる地域として自覚と認識を持っていただく一環として、９か年間に17号の情報誌を編集・発行して参りました（平成22年10月１日～平成31年３月31日）。

最初の４号までは、郷土の歴史や史跡・伝説、伝統・文化、産業等に関する文献・資料（記録写真等を含む）を収集して検討を重ね、これらに造詣の深い地元の方々に執筆を依頼して編集しました。

５号からは、それぞれに特色を持つ各行政区の「今と昔」と題して、区の来歴、お祭りや行事、史跡・石造物、風習、言い伝えなどを取材し、取りまとめて報告することとしました。取材するにあたり13地区の区長さんをはじめ、昔をご存じの方々には、ご多忙な中に地区公民館にお集まりいただき、資料等のご提供、風習の再現、エピソードを含めた興味深いお話など、様々な角度からの情報をいただきました。また、その地区の名所旧跡もご案内いただき、撮影して廻りました。地域の皆さんのご協力に感謝申し上げます。

お陰をもちまして、この度、創刊号から17号までをひとまとめにした総集編を刊行する運びとなりました。もう一度ご覧いただき、久間地区の歴史、文化、伝統等を再認識し、また、区内行事の確認、他地区との比較などもなさってください。その後は、ご自宅の書庫にでも保存し、若い人たちにもお伝えいただければ幸いです。

今後も新たなテーマを検討しながら「和みのさと久間」の発行を続けて行きたいと考えておりますので、久間地区の皆さんのご協力をお願い致します。

なお、皆さんの地域で珍しい話や面白い話、また、埋もれた史跡などがありましたらお知らせ頂ければ取材にお伺い致します。宜しくお願いします。

総務広報部会部会長　　田中三代司
総務広報部会副部会長（情報誌担当班）　　坂本　兼吾

情報誌「和みのさと久間」
総集編

令和元年９月30日

発行　久間地区地域コミュニティ運営協議会
佐賀県嬉野市塩田町大字久間乙１９２０番地１
電話０９５４－６６－５５１６

印刷　鹿島印刷株式会社
佐賀県鹿島市古枝甲２４９番地３
電話０９５４－６２－４１３１